
愛しきローズが紡ぐ唄

神崎 朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しきローズが紡ぐ唄

【Nコード】

N7033J

【作者名】

神崎 朔

【あらすじ】

赤薔薇、黄薔薇、白薔薇、黒薔薇、紫薔薇　神から愛されたとされる薔薇姫達は大陸を守る　人柱　として存在していた。そんな中でたった一つ、青薔薇だけは人から見放され、深い森の奥でひっそりと独りで暮らしていた。そんな薔薇の前に現れたのは五人の自分を守ると告げる、シュヴァリエ達。『青薔薇』の運命を背負う少女と、シュヴァリエとしての役目を果たそうとする傍らで少女と接する事により、様々な想いを生み出していく少年青年。　これは運命に翻弄される者達の物語。

青薔薇とシュヴァリエ（1）

大陸『エバーガーデン』には、神に愛されたとされる『薔薇姫』の化身が大陸を護る 人柱 として存在していた。その理由の一つに薔薇姫が紡ぐ唄が天に届き、神がその唄に応じ、様々な恩恵を世界などに授けてくれるとされている。

今、世界に美しく咲く薔薇は、六つとされる。

赤薔薇は天候を自在に操れると言われ、黄薔薇は自然や大地へ恵みを与えると言われ、白薔薇は日が出る時間帯の結界を護り、黒薔薇は日が沈んだ後の時間艇の結界を護り、紫薔薇は大陸が脅かされるだろう災いをその身に受けるとされた。

大陸の為に生き、神に愛されるとされている薔薇達は大陸中央部に位置する神都にある五本の塔でその身の安全と不自由のない生活を約束された。

そんな中で、たった一つの薔薇は、人々から見放され、一部では神をもから見放されたとされ、人が近寄らない、深い深い森の奥にひっそりと咲いていた。

彼女だけは人から感謝をされる事も無ければ、関わる事もなく、長い間、たった一人で暮らしてきたとされていた。

かの薔薇の色は、『青』。

青薔薇が人の目に晒されたのは今から、1000年程前の話になる。その日から1000年がたった今年、森の奥深くに住んでいた青薔薇に一つの役目が与えられる事になり、薔薇姫を護る事を生涯の仕事とする『ローズ・シュヴァリエ』から選ばれた、『青薔薇』のシュヴァリエ達は自分が護るべき薔薇姫を迎えに行く為に神都を後にする。

これは、『青薔薇』としての運命を背負った一人の少女と、薔薇姫を護る為に生きる少年青年達が少女と出逢い、運命に翻弄されていく、一つの物語である。

ローズ・シュヴァリエ達が寝泊まりする宿舎ではシュヴァリエ達全員が神都の王座の間に集められていた。その理由が分からなかったものの、発表されたのは新しく『青薔薇』のシュヴァリエを選ぶという事だった。

その言葉を聞いた瞬間に誰もが驚く中、興味無さそうに欠伸をする者も居た。

彼らに知らされているのは五人の薔薇姫の存在だ。赤薔薇、黄薔薇、白薔薇、黒薔薇、紫薔薇の五人であり、彼女達には既に選出されたシュヴァリエが付いている為、彼らは次の薔薇姫が選ばれるまではただ、修行に明け暮れるしかない日々が続くはずだった。

だが、告げられたのは『青薔薇』の名。

聞いた事のない色に首を傾げる者が多数いる中で、たった一人だけは複雑そうな表情を浮かべ、軽く目を伏せていた。

「1000年間、『青薔薇』に役目が与えられる事は無かったが神託により、役目が与えられる時が来た。『青薔薇』を護りし、シュヴァリエを五人、輩出したいと思う」

ローズ・シュヴァリエ団長から告げられた言葉に息を呑み、発表されるだろう名前に耳を傾ける。

自分達に与えられた役目はたった一つ。様々な事から薔薇姫を護り、その薔薇姫が生を終えるその日まで傍で仕えるという事。

何百人と存在するローズ・シュヴァリエから薔薇姫を護る役目を与えられるシュヴァリエは名誉ある事であり、誰もがそこに憧れる

とされていた。薔薇姫を護るという事は、自分が生きるこの大陸を護るといふ事に等しい。

与えられる名誉は、何よりも代え難いモノになるのだと、誰もが信じている時代だからこそ、ローズ・シュヴァリエを指す者は多かった。

「選ばれし五人は …… シン、フリード、クラウディオ、ヘルマー、ギルバート、アマデウス、アンリ、ブラディ、ネオン、エレクティシア」

団長より名を呼ばれた五人の反応は様々であった。嫌そうに顔を顰めたり、苦笑を浮かべたり、光栄な事だと喜びに打ちひしがれて居たりと様々である彼らを見つめながら、団長はゆっくりと言葉を続ける。

「お前達五人が護るべき『青薔薇』は今、『深霧の森』の奥深くに一人で住んでおられる。お前達に与えられる最初の役目は、『青薔薇』を無事、神都まで送り届ける事。以上だ」

話はこれで終わったと言わんばかりに団長がゆっくりとその場から去ると、選ばれなかった者達は残念そうな表情を浮かべて次々と王座の間を去って行く。その場に残ったのは選ばれし五人であり、残った五人に渡されたのは薔薇姫を護るシュヴァリエにだけ渡されるとされる騎士服であり、使われている色は、護るべき薔薇姫の色だったので、青、だった。

それぞれがそれを受け取ると、まず、初めに感想を漏らすかのようには面倒そうに溜息を吐いたのはシンであった。

そんなシンの姿を見たアンリは、睨むようにじっとシンを見る。

「……… 不服かい？ シン」

「ああ、当たり前だろ。どうして俺が選ばれたのが聞きたいくらいだ」

「選ばれた事に不服に思うのはどうかと思っけど？ 君だって『ローズ・シユヴァリエ』の一人だろう」

「一応はな。けど、選ばれるなんて思ってる程、自分の力に溺れてるつもりはねえって事さ。……んで、どうするんだよ」

アンリはどうしてもシンの態度が許せなかった為に言い聞かせるようには言いはするも、全く気にする様子もなく、シンは軽い感じに言えば残りの三人へと視線を向ける。

とりあえず、する事と言えば、着替えを済ませ、旅の支度をするという事ぐらいなのだがある程度はすぐに旅立てるように普段から準備はしているのですぐに終わる。

「まあ……メンバーがどうあれ、『青薔薇』を護る為に選ばれたシユヴァリエなんだから、仲間っていう扱いなんでしょ？」

「多分な。……纏め役はこの中では最年長のクラウディオで構わないだろう」

「僕？ ……普通に考えたらそうなるね。じゃあ、着替えと準備を済ませたら門に集合しよう。城下で買い足す物を買いついたらすぐに出発って事で」

「……了解」

「遅れんなよ」

クラウディオから発せられた言葉に誰も異論は無かったかのようにそれぞれに与えられた場所へと戻るように歩き出す。その様子を見ていたクラウディオはそつと目を伏せる。

その表情が悲しげに、切なげに、染まっていた事に気付く者は誰も居なかった。

余計な事を考えないようにクラウディオは小さく首を横に振ると、

自分もまた、着替える為に自室へと戻る事にする。

与えられた役目を果たす為に、旅が始まるうとしていたのだから。

青薔薇とシュヴァリエ(2)

『深霧の森』。

別名、迷いの森とも呼ばれるこの森では、その名の通り、深い霧が出る事で有名だ。奥に行けば行く程、霧は濃くなり、迷ったと思うと森の入口に戻って来ているという不思議な森であり、この森の奥には誰も行けないと言うのが言い伝えであり、この森に近づく者は誰一人としていなかった。

そんな森の誰もが辿り着けないという森の奥深くで住んでいる少女が居た。少女の名は、ローズ＝ラズリーテ。神に愛されし薔薇姫の一人であり、『青薔薇』と呼ばれる少女ではあるが、彼女は産まれたその日にこの森の奥に連れて来られている。

ある程度、育てられると育てられた人とも別れる事になり、たった一人で生きているのだ。

だが、ラズリーテにとってすればそれは当たり前の事であり、それが毎日の日々の在り方であるのでその運命を呪う事もせず、当たり前のように受け入れていた。

ラズリーテはいつものようにぽつんと森が開けている日が差し込む場所に佇んでいる小屋から出て来ると軽く背伸びをして深呼吸をする。

変わらぬ毎日の始まりだった。

「さて……、今日は何をしましょう……？」

軽く身体を動かし終わると、ラズリーテは今日の日程を考えるように僅かに首を傾げて呟く。

一人で住んでいるとする事も限られているが、一人で住んでいるからこその生活に必要なモノを集めたりする事もあった。とりあえずは食糧は足りており、薪なども必要な分はある。する事と言えば水を汲んでくる事ぐらいだという事を確認するとラズリーテは外に置いてある、木で作られているバケツを手にすると近くに流れている川まで向かおうと歩き出した時だったろうか。

ふと、森が騒いでいるような気がして歩きだした足が止まる。

この森が騒ぐ時は決まって誰かがこの森へと足を踏み入れた時だ。とは言っても特殊な術でも掛かっているのか奥まで来れる人は誰一人としておらず、すぐに森は鎮まる。住んでいる自分ですらも出る事は許されていないので森の外に出た事は一度として無かった。

ラズリーテはまた、誰かが好奇心で森へ入って来たのだらうと思ふと歩き出そうとしたのだが、森は一向に鎮まる気配が無かった為に不思議に思う。

何度も何度も入ろうとする物好きは今まで現れなかった。一度入ってみれば無理だと言う事がすぐに分かるからだらうか。ラズリーテは不思議に思いはするも、どちらにしろ、自分には関係ない事だと思ふしかなかった為に水を汲む為に歩き出す。

近くに流れている川までは、歩いて数分ぐらいであるので迷う事もなく、持ってきたバケツで水を汲む。後は持ち帰るだけなのだが、それが一番大変だったりする。

「うう……、頑張りましょう。私しかやる人は居ないんですし……」

自分を励ますように呟くように言うと、よし、と気合を入れて水が入ったバケツを持ちあげたその時だった。どんっ！と勢い良く何がぶつかってくる。

「きゃっ……!?!」

両手は塞がっており、重心が掛かっていた為かぶつかって来た衝撃でラズリーテは体勢を立て直す事も出来ず、川へと落ちてしまう。大きな音と水飛沫が上がり、ラズリーテは全身、ずぶ濡れになってしまいなから少しだけ痛そうに腰の辺りを撫でる。何がぶつかって来たのだろうと思っただけで辺りを見るとそこに居たのは、心配そうな表情で自分を見て来ている一匹の狐だった。

森が騒がしいから森に住んでいる動物達も怖がっているのかも知れない。ラズリーテは自分を見ている狐に対して、微笑み掛けると安心したように頷き、狐は慌てたようにその場から去って行く。

「……………？ どうしたんでしょう」

あれだけ全速力で逃げて行く動物の姿を見たラズリーテは川の中に居るのも忘れて、きよとん、とした表情で首を傾げる。良く分からない事が続く日だなあ、と思いながらも立ち上がるうとした時、がさがさと草を分ける音が聞こえる。

また動物だろうか、とラズリーテが音がする方へと視線を向けると草を掻き分けて出てきたのは自分と近い歳だろう、少年の姿だった。

「……………」
「……………」

互いに互いの顔を見合わせた二人は、どちらも驚きの表情を浮かべてその場に固まってしまふ。ラズリーテにしてみれば初めて見る異性であったので言葉を発する事すら出来ずに居た。逆に少年の方は何かを言おうと口を開こうとするも、後ろからどつかれて前へと転びそうになる。

がさがさと未だに草を掻き分ける音が聞こえる中、少年の後ろからぞろぞろと他の人達も現れる。

「止まるな、シン。前へ進めない」

「そうだよ、邪魔。というか、何でわざわざ、シンが前な訳？」

「深い霧の中では、シンの風だけが頼りだと聞いた」

「……ふーん？」

「というか、何でシンが立ち止まったの？ 地図は役に立たないけど、水が流れる音が聞こえるって事は川が近くにあるって事だろ
うし」

「ああ、そう言えば、さっき、大きな音が聞こえたけど……」

「……お前ら！ どうでもいいが、俺を押すな」

「止まったから仕方ないと言えば仕方ないんだよ、シン。それよりもどうして止まって……」

少年 シンの後ろからぞろぞろと出てきた残りの四人はシンの言葉など聞いていないかのように歩を進め、クラウディオだけは苦笑を浮かべて宥めるように口を開きつつも前の方を見ると見えたのは、川の中に座り込んでいる、青、というよりは瑠璃色の少女がそこに居た。

もちろん、他の面々にもラズリーテの姿が見えたのだろう誰もがそこに立ち止まる中、最初にラズリーテを目に入れたシンは文句をぶつぶつと呟いてはいたものの、無遠慮にラズリーテへと近付くと川の中に座り込んだままのラズリーテへと手を差し伸べる。

「……………？」

「手。起こしてやる」

「あ、ありがとうございます」

きよとん、と不思議そうに首を傾げたラズリーテに対してぶつきらぼつに言い放ったシンの言葉にはっとしたようにお礼を述べると差し伸べられた手に自分の手を乗せる。シンは、その手を握るとぐ

いっと引つ張つて立ち上がらせる。

とは言つても濡れているのはどうしようも出来なかった為に、自分を持つている荷物の中からタオルを出すとラズリーテの頭に乘せてやる。

最初こそ、その意味が掴めなかったラズリーテであつたがすぐに使つてもいいという事だろつという事が分かるとお礼をもう一度言おうとするも、くしゅん、と小さくくしゃみをする。シンははあ、と溜息を吐けばおもむろに両手を伸ばすと出来るだけ優しく頭の乗せたタオルで髪を拭く。

「……他の薔薇姫達と同じで、やっぱり、『青薔薇』もその名の通りなんだね」

「そりゃ、そうでしょ。今まで表に出されなくても薔薇姫には変わりないんだからさ。……というか、本当に居たんだ、『青薔薇』」

「……………信じてなかったんだ、ネオン」
「ああ、この目で見ない限りは信じるつもりはなかったよ、最初っから」

漸く覚醒出来たアンリがぼつりと呟くと、ネオンは当たり前前の事に言葉を紡ぐ。だが紡がれた言葉に苦笑交じりに返せば、キツパリと言いつ切る形で言う。

そんな二人の会話を耳に入れたクラウディオは苦笑を浮かべはするも、大人しくシンに頭を拭かれているラズリーテへと視線を向ける。

「驚かせてしまったかも知れないね。……………確認までに、君が『青薔薇』の薔薇姫？」

「え？ あ、そうです。『青薔薇』のローズ＝ラズリーテです」

「……………間違えないようだ。ローズの名は、薔薇姫にしか与えられない」

「そうみたいだね」

「意外って言ったら意外だが、まあ、『青薔薇』の外見だな。とりあえず、あんたが住んでる場所まで案内してくれよ。別に怪しい人間じゃねえし、一応」

「私には、どの人が怪しくて、どの人が怪しいのかが分かりませんから、そう言ってくれると助かります。じゃあ、案内しますね」

クラウディオとギルバートが確認出来た事に頷いた事を見たシンは、拭く手を一旦止めて、一応、という言葉を使いながらも目の前に居るラズリーテに頼むように言う。ラズリーテはきょとん、とした表情をするも安心したような笑みを浮かべれば、案内するように歩き出す。

だが、彼女から発せられた言葉に五人は少しだけ驚きの表情を浮かべる。

常識から少し外れているというよりは、世間を知らないともいふような言い方だ。当たり前前の事かも知れないが、それを当たり前のように告げられれば誰もが驚きの表情を浮かべる。ラズリーテはそれには気付かず歩き出していたのだが、はっとしたように振り返る。

「何だよ」

「あの、この先に私が住んでる場所があるので先に行って貰っていいですか？ 開けた場所なのですぐに分かると思いますし……」

「あんたはどうすんだ？」

「水、汲むんです。その為にここまで来たから」

いきなり振り返ったラズリーテに対して疑問を投げかけたシンではあったが、その後には紡がれた言葉に不思議そうな表情でもう一度問い掛けると慌てたように川の中まで戻って落としてしまったバケツを手取る。

自分以外の人が来るとは思っていなかったのでバケツを一個しか持って来なかった。

足りるかな、と考えながらもラズリーテはバケツの中に水を入れ直すが自分を見て来ている事に気付いて顔を上げ、僅かに首を傾げる。

「……………君が運ぶの？ それ」

「……………？ はい、そうです。だって、私以外に運ぶ人が居ませんから」

「重くはないのか」

「重いです。だから、先に行ってて下さい。時間が掛かると思うので」

クラウディオから問い掛けられた事に僅かに首を傾げながら当たり前のように答え、ギルバートから聞かれた事は当たり前のように答える。

何度か行き来した方がいいかな、と思いつつもラズリーテは水が入ったバケツを両手で持ち上げようとすればそれを阻止するように横から奪う人が居る。

「え？」

「駄目だよ、こういう時には男を頼らないと。女の子が重い物を持つ必要は無いんだし」

「……………女好きのアンタらしい台詞だよね」

「女性を大切にするのは男としては当然の事だよ、ネオン」

「うーん……………頼るっていう事が良く分からないけど、持ってくれてありがとうございます。運ぶの大変だから、助かります」

横から奪ったのはアンリであり、ニッコリとした微笑みを浮かべながら告げるとネオンがぼつりと突っ込むように言うとそのには自

分の中では当然の事のように返す。その会話を聞いていたラズリーテは良く分からなそうに首を傾げてはいたが、持つてくれる、という事だけは分かっただらしく笑みを浮かべながら礼を述べれば、案内するように先を歩き出す事にする。

ぼかん、とした表情を浮かべたのはアンリであり、ネオンでもあり、他の三人でもあった。

当たり前と言えば当たり前前の反応で、仕方ないと言えば仕方ない事だ。人が近付けないようにされており、たった一人で今まで過ごしてきたのだから。

それを寂しがつている様子がないのは、彼女が今以外の生活を知らないからなのだろうと思う。

何を言うべきかも分からなかった彼らは先を歩いているラズリーテの後を歩くように歩き出したのだった。

ラズリーテに案内されるようにやって来たのは、森が開けた場所。そこにはぼつん、と一つの小屋が立っているだけでそれ以外に目に入るようなモノはどこにもなかった。年頃の少女がこんな所に一人で住んでいるというだけで驚きだが、今の生活に不満を口にしないラズリーテを感心するべきなのだろうか。

そんな視線を向けられている事になど気付く様子もなく、ラズリーテは小屋の中へと案内しようとしたがふと足を止めて、振り返ってしまふ。

突然振り返ったラズリーテに驚く五人ではあったが、驚かれた事を気にした様子もなく、ラズリーテは今更な事を気付いたのだ。

自分が普段、使っている小屋は一人で生活するには申し分ない大きさをしているが自分よりも大きな人が後五人も入るとなると息苦しいと感じるぐらいに狭くなる。詰めに詰められたようになってしまふので、中に入れられそうにはなかった。

大袈裟過ぎるぐらいにラズリーテが肩を落とした事に気付いたクラウディオは声を掛ける。

「あの……?」

「……ごめんなさい。家の中に入れてません」

「入れない……? え……、何かあったの?」

「ありました。皆さんが入ると家がぎゅうぎゅう詰めになってお話ししようにも出来ないと思うんです。だから、ごめんなさい」

「あ、ああ……そういう事。それぐらいなら別に構わないよね?」

皆

入れない、と言われればクラウドイオは驚いたように慌てて問い掛けはするもラズリーテは真剣な表情でこくりと頷いてから、申し訳なさそうに謝る。誰もが見たら気付くような事だったので、ほつと安堵の息を漏らせば他の仲間達に確認を取ると、仕方ない、とばかりに誰もが頷く。

それにはほつと安堵の息を漏らしたラズリーテは、アンリが持っていた水が入っている木のバケツを受け取るとふらふらとした足取りのまま、家の中へと入って行く。

その様子をはらはらとした様子で見ていたものの、最初に溜息を吐いたのはシンであった。

「拍子抜けだな。他の薔薇姫と比べようにも比べものにならないぐらいの、常識知らずだ。本当にあれが、『青薔薇』か？」

「彼女がローズ＝ラズリーテと名乗った限りはそうだろう。ローズの名は、薔薇姫しか貰えない」

「嘘付いてる可能性は？」

「シン、お前には彼女が嘘を付けるような子に見えたか？」

「……いや、全然」

シンの疑問に答えたのはギルバートであったが、逆に問われるとシンは緩く首を横に振った。

あれで嘘を付いているのだとしたら、驚愕モノだ。尊敬ぐらいいくらでもして構わないというぐらいの演技上手な人間だろうという事になる。

そう考えれば、彼女の口から告げられた言葉に嘘はないのだろうという事ぐらいは分かるが、不本意ながらも守らなければいけない薔薇姫が、予想にもしなかつた性格であったのでシンは再び、深々と溜息を吐く。

「けど……、彼女、見事に薔薇姫が持つべき『色』を持つてるからね。綺麗な瑠璃色だと思うよ」

「アンタってそればっかだよ、アンリ。……でも、まあ、他の薔薇姫を見る限りでもあんな感じだからね。『青薔薇』らしい色ではあると思うけど」

「へえ……？ 珍しいね、君が褒めるなんて」

「褒めてはいないから」

「ほら……、アンリもネオンも言い争わない。僕達は『青薔薇』を守る為に選ばれたシユヴァリエなんだから。……それに彼女自身、自分の役目が来た事に気付いてない可能性もある」

言い合いが始まりそうだったアンリとネオンを苦笑交じりに諷めると、クラウディオは家の中に居るだろうラズリーテへと視線を向ける。

本来であれば、薔薇姫というのはそれぞれの役目を自然と理解しているという。それに必要な知識は受け継がれるというよりは自然と覚えているらしく、薔薇が枯れてしまつたらすぐに新たな薔薇が産まれるこの世界では、どの薔薇姫達も成長していくにつれて薔薇姫としての意識を持つていくという。

それなりの年齢になれば自然と神都に集まる薔薇姫達。その中でもたった一つ、『青薔薇』だけは異質な存在であった。彼女の役目だけは一般の人には知らされず、限られた人と本人しか知らないとされる。

だからこそ、クラウディオは気付いていない可能性を信じたいと思うのだ。

どの薔薇姫も過酷な運命を背負っているとは思うが、その中でも『青薔薇』だけは一際特別な運命だ。クラウディオはどう言えばいいかも分からずに悶々と考え始めていた時だったか、扉を開く音と同時にラズリーテが出て来る。

ラズリーテは板のようなモノの上に、唯一あつたのだろう人数分のカップを乗せてふらふらとした足取りで歩くものだから、アンリが立ち上がるうとしたのだがその前にシンが立ち上がってラズリーテからカップが乗せられている板を奪う。

「…………ふえ？」

「アンタ、危なっかし過ぎる。とりあえず、全員に渡せばいいんだろ？」

「あ、は、はい」

奪われたラズリーテは驚いたような表情で目の前に居るシンへと視線を向けるが、シンはどこか呆れた表情になりながらも問い掛ければ、慌てたようにラズリーテは返事をした。その返事を聞いたシンは周りからの意外そうな視線を受け流しながら置かれているカップを順々に渡して行き、最後に残った残り一個のカップを手に取りると適当な場所に座る。

一口だけ口を付けると、中々美味しかった。

さすがは森の中での生活に慣れているなと思いつつも、ラズリーテはちよこん、と家の前辺りに正座をすると改めて自分を訪ねてきたのだろう面々へと視線を向けると僅かに微笑む。

「え、つと…………『青薔薇』の役目は知ってます。その『青薔薇』の私を迎えに来たって事は…………役目を果たす年になつたって事ですか？」

「…………そうらしい。詳しい内容は聞かされていないが、『青薔薇』の薔薇姫に役目が与えられたと神託が下ったそうだ」

「そうですね…………、長いような、短いような、1000年でした」

「…………？ どういう意味だ、それは」

自分を訪ねてきただろう内容を先に告げると問い掛ければ、ギル

パートが肯定するように頷く。その後には呟いたラズリーテの言葉に反応も返したのだが、ラズリーテは曖昧な笑みを返すだけだった。

誰もがその意味を知らない中、クラウディオだけはそっと目を伏せる。

知らなければ良い事と、知らなければならぬ事という事がある。彼女にとってはそれが重なっていただけで、本来ならば知らない方が良かったと思うのだ。心からそう思うのに、彼女はただ、知っていると言った。

微笑みながら、当たり前のように告げたのだ。

「……………。僕らは『青薔薇』を守護する事を命じられたシュヴァリエなんだ」

「シュヴァリエ……………あ、知ってますよ。ずっと薔薇姫に付いてるみたいですね」

「みたいですねって……………、歴代の『青薔薇』には？」

「『青薔薇』の役目があったのは100年前だけです。その間ずっと、『青薔薇』は私と同じ生活をしてたって聞いてます」

クラウディオは内にある他の言葉を隠すように自分達の正体を告げると、ラズリーテは繰り返すようにその言葉を繰り返せば、思い出した、とばかりに頷く。その言い方が気になったネオンは問い掛けるが、ラズリーテは極々当然の事のように告げる。

100年。

100年前にあった事は今の歴史でも詳しく伝えられてはいない。だからこそ、何があったのかなどと聞くのは容易いが聞かない方がいい事もあるという事も分かっているので簡単には問い掛ける事が出来ずにいた。

もちろん、目の前で笑っているラズリーテに問い掛けるのは簡単だ。簡単だが問い掛けるような真似はしなかった。

「自己紹介、しようか。……僕は、クラウディオ^①ヘルマー。彼らからはたまに「クラウ」って呼ばれる事もあるよ」

「次はオレか。ギルバート^②アマデウス。……ギル、と呼ばれる事はある」

「それで俺が、アンリ^③ブラディ。薔薇姫を守る役目を貰えた事は誇りを抱いてるよ」

「どうでもいいから、その辺りは。僕は、ネオン^④エレクティシア」

「……俺が最後かよ。俺は、シン。シン^⑤フリード。まあ……、よろしく？　ラズ」

「ラ、ズ……？」

「逢ったばかりの女の子にまで呼び名を付けるかい？　普通。……」

「じゃあ、俺は、リーテって呼ばせて貰おうかな」

「リーテ……？」

名前を覚えるようにラズリーテはぶつぶつと呟いてはいたも、ふと最後のシンから呼ばれた名前に思わず顔を上げ、続けられたアンリからの呼び名に首を傾げる。他の三人も、じゃあ自分も、とまで言い出しており、ラズリーテのみが少々会話から外れる形になる。

だが、すぐに聞き慣れない呼び名が自分なのだと分かればふつと嬉しそうに笑みを零す。その事に気付いた人は誰も居なかったが。

青薔薇とシュヴァリエ（4）

自己紹介を済ませ、それぞれの呼び名も決まったのだがラズリーテのみは必死になって名前を覚えるように繰り返している。今まで人と関わる事が無かった為に名前を覚えるという事も無かったのだが、これから長くなるか短くなるかは分からないが、一緒に居る人達であるので名前ぐらいはしっかりと覚えなければ、と思っっている。そんなラズリーテの様子を微笑ましげに見守っていたのがシュヴァリエの面々ではあったのだが、シンだけは何を思ったのか、呟き続けているラズリーテの額をつつく。

「ラズ。俺に「さん」はいらないからな」

「……………？ でも、年上さんでは？」

「あー……………、俺は15だ。アンタは？」

「16です。……………あつ、一つ年下なんですね、じゃあ、「さん」はなしで」

シンから告げられた言葉にきよとん、と首を傾げはするもすぐに年齢を告げられれば、年下には付けなくていいのだろう、という理解の仕方をする、分かったように小さく頷く。

その後ラズリーテは他の面々へと視線を向けるが、他は緩く首を横に振るだけだった。

年齢を聞かなくても残りの彼らが全員、年上である事を確認するとラズリーテはまた覚えるように呟き始めてしまった。とは言ってもこのまま、延々と続けられても困るので苦笑を浮かべながらクラウディオが口を開く。

「リーテ？ とりあえず、君には神都に来て貰う事になるんだけど……」

「……しん、と？」

「ああ、土地勘もないよね……。まあ、そこまで連れて行くのが最初の任務だから連れて行く事になるんだけど……構わない？」

「……はいっ！ つまりは、森の外に出られるって事ですよね？」

「一度出てみたかったんです」

「………もしかして出た事は」

「ないですよ？ だって、出れませんから」

クラウドディオから説明された内容に不思議そうにしていたラズリーテではあったものの、すぐに了承するように頷く。その言葉に引つ掛かったギルバートが聞くと、ラズリーテは極々当然の事のように答える。

確かにこの森は自分にとっては庭のようなものだった。

歩き慣れているし、大体の道ならば分かるが、森の外へ出る事は出来なかった。元々、出るな、と言われていた覚えはあるし、出ても自分では何も出来ないだろうという事だけは分かったので出ようとする事すらしなかった。

出ようとしたら霧が深くなるだけだったので、元々、『青薔薇』が逃げ出さないように特殊な術でも掛けているのだろうと思っていた。逃げ出そうと考えても、逃げ出さないように。どちらにしろ、薔薇姫である限りは運命から逃れる事は出来ないのだと言われていた。出ようだった。

ラズリーテはほんの少しだけ顔を曇らせたがすぐに笑みを浮かべると僅かに首を傾げる。

「いつ、出るんですか？」

「出来れば早めに出た方がいいとは思うけど……ねえ、クラウド？」

「アンの言う通りだね。神都まではかなりの距離があるし……、出来る限りは早くに、連れて行かないといけないだろうし、ね」

「……………連れて行きたくないように聞こえるけど？ クラウディオ」
「……………」

クラウディオが肯定するように頷けば、じつとその様子を見ていたネオンはただ何気なく言葉を紡ぐとその言葉に言い返す事はなく、僅かな苦笑だけを返した。

それが凶星なのかそうではないのかは読みとれなかった為にネオンは、はぁ、と溜息を吐いてそれ以上深く問い掛ける事はしなかった。それには安堵の息を漏らしながら、外に出られるという事で喜んでいるラズリーテへと視線を向ける。

16歳の少女に課せられたのは、重い運命。

他の薔薇姫達も同じように重く、辛い運命と戦っているのは分かるが彼女達はまだ、対応的には良い方なのだろうと思う。不自由の生活が出来、ある程度の幸せを手に入れられて生涯を終える事が出来るのだから

だが、彼女だけはどの薔薇姫とも違う。

人から見放され、人から隔離され、一人で生き、一人で生涯を終える。それを当たり前だと思わされているのは、彼女ではなく、彼女をこのように追いやった者達だ。それにいつか、彼女は気付くのだろうか。

クラウディオはその時に味わうだろう孤独がどうしようもなく辛いものであるような気がして、ただ、苦笑を浮かべる。

「……………その辺りはどうでもいいんだけどよ、ラズ。アンタさ、体力、ある？」

「体力……………、あると思いますよ？ 追いかけては良くします！」

「誰と」

「動物さん達と」

「……………おい、なあ、ギルバート。これ、本気で言ってると思うか」

「間違えなく、本気で言ってると思う」

交わされている会話には興味がないとばかりにシンはまず気になった事を問い掛ければ、ラズリーテは日々の生活を思い出しながら、はい！と元氣よく手を挙げながら自信満々に言い切る。追いかけてこ、というのはつまりは相手が居るのだろうがラズリーテ以外の人間は居ないだろうと思ひ、半信半疑で問い掛ければラズリーテは迷う事も悩む事もなく、ニツコリと笑って言う。

当たり前のように答えられてシンは暫しの間、言葉を失ってしまふが軽く頭を押さえながら近くに居るギルバートに問い掛けるように聞けば、ギルバートはじつとラズリーテを見ながら肯定するように頷く。

もちろん、シンも彼女が嘘を言っていると本気で思った訳ではないが、本気を本気として受け取れない部分があるのは確かなのだ。追いかけてこの相手が動物しか居ないのは分かる。

分かるには分かるが、動物が人間の言葉を理解して、ラズリーテも動物の言葉を理解して追いかけてこをしているのだと疑う事なく信じろという方が無理があるのだ。

深く考えれば考える程、頭痛が激しくなってきたような気がしたのでシンは考えるのを止めて、最終的な決定をするクラウディオへと視線を向ける。

「クラウディオ、さっさと決めてくれ……。コイツに世の中の常識を教えたくて仕方ない」

「あはは……。分かったよ、リーテの準備が出来次第、向かう事にしよう」

「……………準備……………って何すればいいんですか」

「あー、もっつ！ 服とかその辺を持ってこいって事だよ」

「んー……じゃあ、準備はなしですっ！ 行きましよう」
「は………？」

疲れた様子で言われるとクラウドイオも空笑いしか出来なかったのか、ラズリーテへと視線を向けて決まった事を告げる。だが、告げられた言葉の意味が分からなかった事を問い掛けるラズリーテに対して、シンは痺れを切らしたように告げると、少しの間考える仕事を見せていたがすぐに歩きだしてしまう。

もちろん、歩き出した事を言われた言葉に呆気に取られたのはシンだけではなく、他の面々も同じだ。

年頃の少女が、ありません、と告げるのも珍しいというよりも、普通に考えてあり得ない。森から出られないのであればそれ程、持つていないのかも知れないが持つて行かないぐらいに少ないとは思えない。

「ちょ、ちょっと……リーテ？ 本当に何も無いの？ 持つて行くモノ」

「無いですよ？ だから大丈夫です」

「いや、大丈夫って……ラズ、女の子としてそれはさすがにどうかと思うよ？」

「今回ばかりはネオンに同意するよ。もうちょっと気にしても……」

「ネオン、アンリ。……街に入ったら買ってやればいい、それで問題は無いだろう」

「……そうだね、ギルの言う通りだ。さすがに今の格好のままじゃ、色々不審がられるだろうしね」

「はあ………そうなんですか」

全く頓着の無いラズリーテをどうにかして説得しようと言葉を紡ごうとしたが、その前にギルバートが止めて妥協案を提供する。クラウドイオもギルバートに同意するように頷けば、ラズリーテはき

よとん、と不思議そうに首を傾げるだけだった。

そんなやり取りを見ていたシンは、はあ、と一つ溜息付けば、ふと柔らかな風が吹いたのでふっと僅かに笑みを零す。

「ま……、世界は応援してるみたいだな、『青薔薇』を」

「……シン？」

「行くか、ラズ。 アンタがまだ見た事のない、外の世界ってやつに」

「……………はいっ！」

ぼつり、と呟いた言葉を微かにだけ聞き取ったラズリーテは不思議そうに名前を呼ぶも、シンは笑みを浮かべたまま、残りの四人が見ている中で手を差し伸べる。その手を見たラズリーテではあったも、すぐに元気よく返事をすればシンから差し出された手を取る。

四人はその様子を見て、あ、と声を漏らしてしまうも、互いの顔を見れば苦笑を浮かべる。

先を歩き始めたラズリーテとシンの後を追うように、彼らもまた、歩き出したのだ。

『青薔薇』はシュヴァリエと出逢い、シュヴァリエは生涯を捧げる薔薇姫を見付けた。先の事はまだ見えない中で、逃れられない運命の渦へと引き摺りこまれていくのだった。

眠れない街「ナイトメア」(1)

大陸中央部に位置する神都『レヴェリツジ』。

大きな城下町があり、五本の塔に囲まれるように城が聳え立つこの神都こそが大陸『エバーガーデン』の中心部であり、城に住んでいる神王と呼ばれる存在が大陸全ての有する権力者でもあった。その理由の一つに彼女達、薔薇姫を保護し、護る役目を担っているという事もあるのだが、もう一つ、何よりも重大な役目を与えられるのだ。

神王と呼ばれる存在は、「神の声を聞きし者」として崇められ、神を絶対なる存在とするエバーガーデンの民にとっては、その神の声を聞ける神王は何よりも尊き人物であると崇められるのだ。

そんな城の王座の間には、椅子に神王であるエリファレイト^{II}テイラー^{II}レヴェリツジが座っており、他にはローズ・シュヴァリエ団長を務めるグレン^{II}バイル、同じく副団長を務めるマクリミアン^{II}クローリアが居た。団長、副団長は異例として神王を守護する役目を担っている。

他には誰も居なかった為に、神王であるエリファレイトは、だらん、とだらけるな体勢になる。その様子を見たグレンとマクシミリアンは苦笑を浮かべるが咎める事はしなかった。エリファレイトの年齢は27歳であり、まだまだ若い世代に当たり、そんな彼と二人は朋友と呼ばれる存在だったからだ。

「……そう言えばさ、グレン。『青薔薇』のシュヴァリエ、あんな若い連中で良かったのか？」

エリファレイトは、ふと思い出したように苦笑を浮かべながら佇んでいるグレンへと視線を向ける。薔薇姫を守護するシユヴァリエを選出する役目を担うのは、団長であるグレンの仕事であった。もちろん、副団長であるマクシミリアンも共に選ぶのだが、最終的な選抜はグレンが行っている。

それを知っているからこそ、エリファレイトはグレンへと問い掛けるのだが、問い掛けられた内容にグレンは何とも言えない表情を返すだけだった。

確かに若い年代ばかりではあるが、腕は確かなので護るに当たっては何の問題もない。それはあくまで力量であり、エリファレイトが問い掛けて来ているのは精神的に、という意味なのだろう。

ここに居る誰もが『青薔薇』に与えられた役目を知っている。

正確にはエリファレイトが否応なく知り、それをグレン、マクシミリアンの二人が知らされたという話なのだが。

「……正直、不安は残る」

「じゃあ、どうして、あえて彼らにしたの？」

「深い意味はなかった。……ただ、若い世代ならば或いは茨に囚われ続けている薔薇姫を、救えるのではないのだろうか、と思っただけだ」

ぼつり、とグレンが素直な感想を零すとマクシミリアンは不思議そうな表情で更に問い掛けると、グレンはどこか複雑そうな表情で自分の考えを少しだけ小声になりながら言う。

『青薔薇』以外の薔薇姫達は、今の境遇に満足しているからいいのだろう、と思う。それでも『青薔薇』だけは茨から解放放ちたいと思ったのだ。

出会った事も、見た事も、その存在すらも知らなかった『青薔薇』に課せられた役目は、どの薔薇よりも重く、どの薔薇よりも哀しき運命。それをたった一人で背負い続ける『青薔薇』と共に生きると

決められるのは若く、誰よりも一途で居られる者だと思ったのだ。

選んだシユヴァリエの中でもたった一人だけでいいから、『青薔薇』と共に生きると誓い、『青薔薇』に課せられた重く哀しき運命を、共に経ち切って欲しいと、ただ、そう思ったのだ。そんな事を望んでいない、と言われればそれまでかも知れないが、これは自分の自己満足なのだと言う事は重々承知している。

『青薔薇』のシユヴァリエ、という立場に選んでしまった以上、彼らもまた、『青薔薇』に課せられた運命に向き合わなければいけなくなるのだから。そうした時に支え合える仲間になって欲しいという願いも少なからずは込められている。

「……じゃあ、どうして、クラウドイオにだけは告げたの？ 『青薔薇』の役目を」

「教えて欲しい、と請われた。自分が守るべき、薔薇姫に与えられた役目を知りたい、と。最初は告げるべきではないと思ったんだ。だが……」

「だが？」

「……断れなかった」

グレンの気持ちは分かったのだろう、マクシミリアンはふっと僅かに苦笑を浮かべれば気になって居た事を問い掛けるとグレンは、視線を下に向けながらぼつり、とたった一言だけ零した。

断ろうとした。教えられないと告げようとした。

そんな自分をクラウドイオはじっと真っ直ぐに見て、こう告げてきたのだ。

『薔薇姫を守り、生涯仕えるのがシユヴァリエの役目なら……僕は、全てを守りたいと思うんです。他の薔薇姫とは違い、たった一人で生きていくという『青薔薇』の全てを。身も心も守ってあげたい。

そう思うのはおかしい事ですか？』

おかしな事だ、などと言えるはずもない。真っ直ぐに見てくるクラウディオが心からそう告げているという事が分かったからこそ、グレンは、ただ、まいった、というような諦めたような笑顔を浮かべて告げたのだ。

告げた瞬間のクラウディオの表情は、きっと生涯忘れる事は出来ないだろうと思う。

若きシュヴァリエの強い思いに敵わなかった。出会った事もない薔薇姫をそれ程までに思うシュヴァリエの思いを踏みにじる事など出来はしなかった。グレンの気持ち痛みほど分かったのだろう、マクシミリアンは、何も言わずにただ、微笑みを浮かべるだけだった。

「……………まあ、おかしな世界だよな。たった五人……………いや、六人の少女を 人柱 と捧げ、神に少女の歌を捧げ、ただ、俺達はその恩恵を受ける」

「……………エイト」

「分かってるさ、そうしなければここで生きて行く事が出来ない。薔薇姫と呼ばれる彼女達を捧げる事でしか、俺達は生きている事すら出来なくなるんだ」

二人のやり取りを見守っていたエリファレイトは、上を見上げながらぼつりと呟く。その言葉を聞いたグレンとマクシミリアンは、今だけは呼ぶ事を許される彼の愛称で名を呼ぶと、エリファレイトは苦笑を浮かべながら、分かってる、と。自分に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

そう、誰よりも分かっている。

薔薇姫に請い、歌を唄わせるのは自分の役目なのだから。薔薇姫が唄を神に捧げれば、神は薔薇姫が紡いだ唄の種類により、この世界に恩恵を授けてくれる。平穏で、豊かに暮らしていけるのは一重

に薔薇姫という存在が居てくれるのおかげだと分かっている。
分かっているけれど、それでも納得出来ない部分があるのも確か
のだ。

神が愛したという薔薇姫達。その化身、つまりは薔薇姫の魂を受
け継ぐ者が否応なく、薔薇姫として定められ、その身を大陸『エバ
ーガーデン』の為に捧げられる。

魂の連鎖。定められた運命。

決して逃される事が許されない。彼女達は薔薇の茨に囚われ続け
ている。運命と言う名の、薔薇の茨にいつまでも、未来永劫に、
囚われ続けている。

「なあ、グレン、マックス」

エリファレイトは上に向けていた視線を、この場に居る朋友へと
向ける。名を呼ばれたグレンとマクシミリアンは、視線をエリファ
レイトへと向ける。

「……………可哀想だよな、薔薇姫」

「……………ああ」

「本当に……………そんな薔薇姫を誰もが恋焦がれるのは、当たり前
の話なのかも知れないね」

ぼつり、と色々な意味を込めて呟いた言葉にグレンはただ頷き、
マクシミリアンもまた、頷いて同意しながら薔薇姫を思いながらぼ
つりと呟く。

手の届かない存在だけど、全てを与えてくれる存在。

それは豊かさを与え、平和を守り、災いからその身を挺して守っ
てくれる。そして何よりも、未来永劫なる命を与えてくれる薔薇姫
を、誰もが恋焦がれるのは当たり前の話なのだ。

エリファレイトもグレンも、マクシミリアンの言葉には苦笑を浮

かべ、同意をしつつ、『青薔薇』と出会ったのだろっしょヴァリエ
達の身を案じるのだった。

眠れない街「ナイトメア」(2)

ラズリーテと出会った深霧の森を出られたのは、陽が落ちて辺りが暗くなった時の事だった。何とか夜になる前に森の外へと出る事は出来たのだが歩き続ける事は不可能だという見解が出され、森のすぐ傍で野宿をする事が決まった。

慣れた野宿の準備をする五人のシュヴァリエ達の様子を見て、手伝おうとはしたラズリーテであったが全く分からなかった為に大人しくしている、というお達しが下ってしまったので広々とした場所でラズリーテは頭上一杯に広がる夜空を眺める。

きよるきよると辺りを見回しても木に囲まれている場所ではなく、開けた場所。それが自分が外に出た証拠なのだという事が分かるとラズリーテは嬉しそうな表情になりつつもぼすん、とそのまま、後ろに倒れるように横になった。

視界一杯に広がるのは何にも遮られていない、満天の星空。

そっと目を閉じて聞こえるのは風の音と近くの森から聞こえる葉が擦れ合う音だけだったのに、今はほんの少しだけ離れた場所で知り合ったばかりの人達の声が聞こえて来る。

それがどうしようもなく嬉しくて、幸せで。

ラズリーテはゆっくりと目を開けて、満天の星空を堪能しようと思っただがふと耳に届いたのは、唄。知ってはいるけれど、聞いた事はない、唄。

深霧の森の中に居た時は特殊な結界でも張られていたのかも知れない、自分が唄を紡いでも、外に届く事も神に届く事も無ければ、他の薔薇姫達の歌声が聞こえる事はなかった。

けれど、確かに耳に届くのは、『黒薔薇』の唄。どれだけ遠く離

れていようが、同じ薔薇姫である限り、その唄は耳に届き、この唄が神に届けられるように祈るのだ。

ラズリーテはゆっくりと起き上がるとそっと手を祈るように胸元に手を当てて、ゆっくりと目を閉じる。そんな祈るような仕草を取って居た事に気付いたのは誰よりも先に作業を終わらせたシンで、ラズリーテへと近付いてくるとぽん、と肩を叩く。

「ひゃっ……!？」

「どういう声出してるんだよ、ラズ。……何してたんだ？」

「神に祈りを捧げていたんです。『黒薔薇』の唄が届くように」

「……知ってるのか？ 他の薔薇姫を」

「知りませんよ？ ただ、引き継がれる魂だけがその存在を覚えてるんです。だから、他の薔薇達が唄を捧げる時には、その唄が届くように祈りを捧げるんです。神に無事届くように」

「ふーん……？ ラズは……、神に唄を捧げた事はねえの？」

「ないですねえ……、あの森に居た時にも唄を歌った事はありますが、届けられた事はないです。だから、捧げる事は出来なかったです」

ラズリーテは思い出したように言いつつも、ふと苦笑を浮かべればシンへと視線を向ける。シンはそんなラズリーテを見つつも、おもむろにラズリーテの隣へと座る。

不思議そうに自分を見て来る視線には気付いているが、それには何も返さずにシンは風に耳を傾けるようにゆっくりと目を閉じる。風が運んでくる声に耳を傾けながら、くすり、と小さく笑みを零すと目を開け、ラズリーテへと視線を向ける。

「……？ どうしたんです？」

「アンタの唄は好きだったさ」

「……え？」

「どの薔薇姫の唄より、アンタの……ラズの唄が誰よりも好きだつて言ってる」

「誰がです？」

「風が。……神に届かないのが勿体ないって」

シンの言葉の意味が掴めずにラズリーテは不思議そうな表情で問い掛けつつも、シンは当たり前前のようにあっさりと告げる。

もしかしたら、自分も聞いた事があるかも知れない彼女の唄。

誰の歌声かも知らない唄は、何度か耳にした事がある。時には綺麗な歌声であったり、哀しげな歌声だったり、誰かに祈るように歌っている歌声もあった。その中であつた歌声のいくつかが薔薇姫達が紡いでいる唄だつたのだろうと思う。

その歌声が聞けるのは、神とシユヴァリエ、そして神王と呼ばれる存在だけなのだという話は聞いた事はあるがそれは確かだ。生きている中で一度も薔薇姫の歌声を一般の人が耳にした事などないだろう。それだけ神聖であり、神にのみ捧げられるという、証拠。

「シンは不思議です。風の声が聞けるんですか？」

「まあ、そうなるのか」

「シンは特別な存在だからね。……リーテ、退屈だつたでしょう？ 待たせてごめんね」

「クラウドディオ！ お前……話聞いて……？」

「さあ、ね？ いいじゃない、その辺りは。とりあえず、二人ともおいで。皆が待ってるよ」

「って、おい！ 待って……！」

「……？ 何で慌てるんです？ シン」

「んー……お年頃だから、かな？」

「だから、おかしな事を言っんじゃねえって！」

並んで座っているラズリーテとシンの背後に立ち、クラウドディオ

はくすくすと小さく笑みを零しながら声を掛ける。どこか慌てた様子で問い掛けて来るシンには何も言わず、促すように言ってもシンは真相が知りたいらしく、未だに慌てた様子で聞いている。

そんなシンの様子を不思議そうに見ていたラズリーテは思わず、疑問を口に出してしまつとクラウディオは楽しげな表情で告げて来る。それを否定するようにシンは言い返しはするも、それを聞いている様子はなく、クラウディオは、行こう、と促す。

お年頃……、とラズリーテはその言葉を考えるように繰り返して呟くのを聞いたシンは考えるのを止めさせようとしながら、準備を終えた残りの三人の元へとやって来る。少々不思議な光景が見えた為にギルバートが問い掛けようと口を開き掛けたが、クラウディオは悪戯っぽく笑みを浮かべて唇に人指し指を当てる。

それで何となく予想がついたギルバートは問い掛ける事はせず、小さく頷いた。

「……アンタも好きだよね、クラウディオ。苦勞人ってイメージが付きやすいのに」

「んー……、まあ、たまには、ね？」

「性格が良いのか悪いのか……分からないね」

「ネオン。俺的には、クラウは良い人だけどやっぱり悪い部分を持つているっていうのが正解だと思うよ？」

「いや、意味分からないから、アンリ」

どこか呆れた様子でネオンが言うと、クラウディオは悪戯っぽい笑みのまま、僅かに首を傾げる。そんな様子を見てネオンははあ、と溜息をつくとアンリは自分なりに出した答えを言えば、その言葉をすぐに切り捨てる。

一刀両断、という言葉が正しいかのようにすぐに切り捨てられたアンリは軽く落ち込んだように肩を落とす。三人のやり取りを見ていたギルバートは小さく息を吐くと、こちらでも言い合っている二

人を見る。

言い合っているというよりは必死になって考えているラズリーテの思考を止めさせようとシンが頑張っている、という言い方の方が正しいかも知れない。

逢ったばかりで、まだ仲間として日は浅いだろう自分達だけれど。意外と相性はいいらしく、出会ったばかりの『青薔薇』とも上手くやっていけるかも知れない。ギルバートはそんな事を思いながら、どうやって収拾を付けるかという事を考える事にした。

眠れない街「ナイトメア」(3)

森の近くで一夜を過ごした一行が向かうのは神都ではあるが、かなりの距離がある為に旅をするという形を取る事になるのだが、とりあえずはラズリーテの身の廻りの品を揃えなければいけないという事から近くにある街に寄る事になった。

実際に言えば、「深霧の森」に来るまでは何度か街を通りながらやって来てはいるが森が近くになるとほとんどが野宿であった為、この辺りの地形にはそれ程、詳しくはなかった。地図も一応は持つて来ているが小さな村や街などは地図に記される事はないので、旅行く人に聞くか、地図に書いてある大きな街まで行くか、という事ぐらいしか出来ない。

それは理解しているものの、リーダーを任されているクラウディオはラズリーテへと視線を向ける。向けられたラズリーテはきょとんと首を傾げる。そんなラズリーテに対して微笑みを返しはするも、大きな街に入るにしてもかなりの注目を浴びる事になるだろう。それ程汚れているという訳ではないが、所々は解れているし、何よりも外見と服が合っていない。その事に誰よりも耐えられないのがアンリだったらしく、ラズリーテの肩を真正面から掴む。

「リーテ！ 大丈夫、君ならきつと可愛くなれる。元が可愛いから、服ももつと可愛いのが絶対に似合ってる」

「……は、はい……？」

「いいかい、リーテ。女の子というのはね、綺麗なままで居ていいんだよ。汚れるのは男だけで十分なんだから」

「あ、あの……？」

「アンリ、ラズが困ってる。というかアンリの考えはどうでもいいから」

「ネオン！ 言っておくけど、俺はこれだけは譲らない。薔薇姫であるうがリーテは女の子なんだからね。差別される事なく、綺麗になるという事に幸せを覚えたって問題は無い」

「分かったから。アンリの考えは聞き飽きた。僕が言ってるのはラズが全く意味が分からなさそうに困ってるって事だけ」

必死な形相で訴え掛けて来るアンリを見てラズリーテはどう返せばいいか困惑していると、アンリの暴走を止めるように後ろからネオンが引く張る。だからと言ってアンリが引きさがる事はなかったものの、ネオンは溜息交じりに言えば、はっとしたように慌ててラズリーテを離す。

少々申し訳なさそうな表情で見て来るアンリを見て、ラズリーテは、大丈夫ですよ、と言いながら微笑みを浮かべる。それにほっと安心した溜息を浮かべながら、ラズリーテとネオンの三人でどんな服が似合うかと話し始めている。とは言ってもラズリーテが入っている訳はなく黙って聞いているだけで、ネオンは迷惑そうな表情を浮かべはするも、きちんと自分の意見を告げている所を見ると意外と乗り気なのかも知れない。

そんな三人のやり取りを見ていたクラウディオは困ったような笑みを浮かべれば、意見を求めるように呆れた様子で見ているシンと表情は変わっていないが、どこか微笑ましそうに見ているギルバートへと視線を向けた。

最初に視線の意味に気付いたのはギルバートであったので考えるように上を見上げていたが、ふと何かを思い付いたようにシンへと視線を向ける。

「何だよ」

「お前の風で探せないか？ 近くにある村や街を」

「あ……？ そんな便利な力じゃないんだけどな」

「んー……、でもギルの考えは確かに一番有力かもね。シン、村や街を探せなくても人は探せるんじゃないのかい？ 音を聞く事が出来るんだろう？ 人が生活する音なら知ってるはずだろうし」

「……なるほどな。ま、一応はやってみるか」

二人から提案に、シンは少しだけ考えつつも横目で話している三人へと視線を向けて仕方なさそうに息を吐けば、そっと目を閉じる。

『……風よ』

たった一言とシンが言うと、彼を囲むように風が集まって来る。

その様子を見ていたギルバートとクラウディオであったが、ふと後ろから服を引っ張られた事に気付き、不思議に思って振り返ってみるとそこにはラズリーテが居た。

アンリとネオンの二人と話していたと思ったのだが、話についていけなくなったらしく、こちらにやってきたのだろうという推測を立てはするが、どうしたのだろう、と思いつながら僅かに首を傾げるもラズリーテの視線がシンに向かっていているのが分かり。

ここで漸く、納得したように頷くと説明するようにゆっくりと口を開く。

「リーテ。シンは、今ではもう数少なくなってしまった能力者の中でも、風使いの生き残りなんだよ」

「……のうりよくしゃ？」

「昔は、自然使い、という呼ばれ方をしていたらしい。限られた一族のみにだけ伝わる能力だったらしいが、ある事件がきっかけで今は数が激減している。その為にシンのような存在は希少だ」

「でも、唯一、風使いだけはシンだけが生き残ったみたいだね。……

……ローズ・シュヴァリエに来るまではずっと独りだったみたいだよ」

「独り、ですか……。独りはきつと凄く寂しかったんでしょね」
「ラズも独り……。だったろう？」

「私には森の動物達が居ましたから、独りじゃないです。……。一人でしたけど、独りじゃなかったです」

二人からの説明で納得したように頷きつつも、ラズリーテは風を纏っているシンへと視線を向ければどこか寂しげな笑みを浮かべながらぼつり、と呟くとギルバートが少々不思議そうな視線を向ける。そんなギルバートからの言葉を否定するように緩く首を横に振りながら、安心して貰えるように微笑みを浮かべる。

嘘ではなかった。

寂しいと思う時、不安に思う時。それを感じ取ってくれたかのよう
に動物達は自分の傍に来てくれた。だから、孤独 ではなく
たと自信を持っていう事が出来る。だけど、シンは本当に 孤独
だったのだらうと思うと寂しさがあつた。

独りの寂しさは知っている。物心ついた時には動物も居なくて、
独りぼっちだったから誰よりも知っている。ふとラズリーテが泣き
そうになった時だったろうか、シンは探し終わったかのように風を
解放しつつも伝えようとクラウディオとギルバートへと視線を向け
るも、ラズリーテの表情を見て驚いたように目を見開きつつも近寄
ると、ぼん、と頭に手を置く。

「……どうした？ ラズ。泣きそうな顔して」

「へ？ あ、な、何でも無いです。ちょっと昔を思い出して……」

「ふーん？ ……ま、今度聞いてやるよ。それよりもクラウディオ、
ギルバート。見付けたには見付けたけど……。行かない方がいいか
もな」

「シンがそういう風に言うのは珍しいね。……。どうかした？」

「嫌な風だった。……。何だろうな、肌に纏わりつくような嫌な風だ」

「……シンが言うのであればそうなんだろう。どうする？ 行くか

？」

「気になりはするしね……、薔薇姫を守るシュヴァリエとは言っても、元々は騎士なんだし。大陸に住む民を守るのもシュヴァリエの役目だとは思うよ」

「それもそうか……。アンリ、ネオン、言い争うのがいいが置いて行くぞ」

クラウディオの言葉が尤もだと思ったギルバートは頷くと、未だに言い合っているアンリとネオンへと声を掛ける。それにはっとしたように反応すると慌てたように駆け寄って来る。

「決まった？ 行く所。こっちは未だにリーテの服が決まらなくてね……」

「だからシンプルで良いって言ってるでしょ」

「それは君の好みでしょう、ネオン」

「それを言うなら、アンタの意見だって自分の好みでしょうが、アンリ」

「最終的に決めるのは、リーテだって事が分かってるのかな……。二人とも」

またもや言い争おうとしている二人を止めるように困ったような笑みを浮かべて、クラウディオはぽつりと口を挟むように言いはするも、そんなクラウディオに対して二人は同時に視線を向けて、薦める事は出来る、と熱弁し始めるものだからクラウディオは更に困ったような笑みを浮かべる事しか出来なかった。

どうにも止められそうになかったギルバートは、黙って見守る事にしたらしい。シンは元々話に加わる気はしないのか呆れたように溜息を吐く。

そんな彼らのやり取りを見ながら、ラズリーテは瞳に溜まっていた涙を拭って、楽しそうな笑みを浮かべるのだった。

眠れない街「ナイトメア」(4)

シンの案内を頼りにやってきたのは、一つの街であった。特には変わりのない普通よりは少し小さな街であり、旅人達の休憩地点と考えれば納得が出来る広さではあるが、そんな街が地図などに載っていないのは少々おかしな気がする。

シュヴァリエの誰もがそのおかしさに気付きはするも、ラズリーテにとつてすれば初めての街で好奇心一杯に誰よりも先に街中へと入ろうとしたのだが、その一步を踏み出さず、何かを感じたかのように自分の身体を抱き締めるように怯えた様子になる。

「ラズ？」

「……………シン、この街、おかしいです。『白薔薇』と『黒薔薇』の恩恵が、弱い」

「え？」

「二人の薔薇姫が捧げる唄の恩恵は、結界です。悪しきモノが立ち入らないように毎日唄を捧げてるはずなのに、ここの街の周辺だけ……………結界が弱まって、何かが入り込んだ様子があります」

誰よりも先にラズリーテの異変に気付いたシンは近寄りながら名前を呼ぶと、ラズリーテは近くに來たシンの服をギュッと握りながら、必死になつて説明するように言う。

いきなり言われた内容にシンは驚いたような表情を浮かべつつも意見を求めるように他の仲間達へと視線を向けはするも、分からない、とばかりに緩く首を横に振る。確かに嫌な風は感じてはいたが、

それが何なのかは自分には分からなかった。

それを、薔薇姫である彼女は気付いたとでも言うのだろうか。

同じ薔薇姫であるからこそ、気付ける事なのかも知れないが、それでも気付くというのはおかしな気がしないでもない。『青薔薇』であるが故なのか、それを確かめる術はどこにもなかったが、彼女が嘘を付けるような性格ではない事は逢った当初で分かっている。

とりあえずは、ラズリーテの言葉を信じ、警戒を怠らないように街中へと足を進める事にしたのだ。ラズリーテはギユツとシンの服を掴んだままであったが、あえてシンは何かを言う事はせずに、そのまま居させる事にした。

街の中に入ってみると、全く活気がなく、街に居る誰もが疲れたような、やつれたような表情を浮かべている。それが何を意味するのかは分からなかったが、おかしな事が起こっているという事だけは確かだったようなので、とりあえずは誰かに声を掛けようと思いつきながら口を開き掛けた時だったろうか。街の中の一人が、彼らの姿を見てシュヴァリエなのだという事に気付くと駆け寄って来る。

「シュヴァリエ様……！ そのお姿、ローズ・シュヴァリエの方達なのでしょー！？」

「え？ え、ええ……まあ、そうですが。貴方は……？」

「私はこの街の町長している、オルガスタ・ヒューズと言います。元々、この街は旅人達の休憩地点として存在していたのですが、ある時を境に、おかしくなってしまうたのです。……それ以来、この街は「ナイトメア」と呼ばれるようになりました」

町長だというにはまだまだ、年若い男性　オルガスタは必死になつて説明するように告げると、誰もが顔を見合わせて首を傾げ合う。

ナイトメア。

それが何を意味するのかが分からない訳ではないが、そんな事が

起こるはずもないというのは分かっている。伝承や物語にだけ存在する、魔族と呼ばれる存在の中でも「夢魔」と呼ばれる存在であったはずだ。

もちろん、それが実際に存在したなどという事は聞いた事などなかったし、存在するとも思っていないかった。薔薇姫の恩恵がある限りは彼女達が悪しきモノと認識している存在であれば出入りする事など出来ないとの大陸「エバーガーデン」にする民であれば誰しもが思っている事のはずだ。

シュヴァリエ達もそれは同じ認識であったのでどうにも信じられない様子ではあったが、ラズリーテの発言もあるので頑なに否定する事など出来はしなかったが、心から信じられる訳でもなかった。その中でもラズリーテだけはそつと街中を見るように視線を彷徨わせて見えたのは、どこかやつれた表情をしている街の人達の顔。

目の下には隈が出来ており、数日の間、眠れていないのだからという事が見ればすぐに分かる。とは言っても夢の中だけ現れる存在をどうにかしろ、と言われても無理な話があるのかも知れない。

「シュヴァリエ様であられるのであれば、どうか、薔薇姫様達に一言申し上げて欲しいのです。この街をお守り下さい、と」

必死になって願って来るオルガスタをどうにかして宥めようとクラウディオが頑張っている中で、他の面々は集まると小声で話し始める。

「悪しき存在が入り込んだ後に薔薇姫に願っても仕方ないと思うけど?」

「そういう事は言うものじゃないよ、ネオン。……でも実際に、結界を強めても出て行くとは思えないね。もう既に結界の内側に入り込んでるんだから」

「……アンリの言う通りだ。だが、実態のない存在を排除する、というのも難しい話だろう」

「確かにそうなんだよね。……夢の中に入って倒せ、なんていう話

「は到底無理だし」

三人がひそひそと話し合いをしている最中、ラズリーテは祈るように手を組み合わせるとそっと目を閉じる。三人の言っている意味は分かっているつもりだし、今更どうにかする事など出来ないという事も何となく分かる。

夢の中に入り込んで倒す、などという話はそれこそ、夢のような話のような気がする。ラズリーテはふとそこまで思いながら、何かを思い出したように目を開けるとくいつと近くに居たシンの服を引っ張る。

「ラズ？ どうした？」

「もしも、夢の中に入れたら、シン達は夢魔を倒す事は出来ます？」

「あー…………、そうだな。もしも入れたら可能かもな」

引っ張られたシンは不思議そうな表情でラズリーテへと視線を向けるが、そこから紡がれた言葉に驚きの表情を浮かべ、無理だと思いつつも、もしも の話であったので、その仮定を考えつつも肯定するように頷くと、ラズリーテはどこか嬉しそうに笑顔を浮かべる。

その意味が分からなかったシンは名前を呼ぼうと思いはするも、その前に、町長と話しているクラウドイオへと近寄って行くので、シンはその様子を見守る事しか出来ずにいた。

ラズリーテはとことと近寄りながら、今度はクラウドイオの服を引っ張る。引っ張られたクラウドイオは不思議そうな表情で振り返りながら、どうしたの？とばかりに首を傾げる。

「クラウドイオさん。その夢魔ナイトメアさんを、私達で倒しましょう」

「……………え？」

「えー！？」

振り返ったクラウディオに対してラズリーテはニツコリと満面の笑みを浮かべながら、突拍子もない事を紡げば、言われたクラウディオはもちろんの事、少し離れた所で話し合ってた彼らにも聞こえたのだろう、あのギルバートですらも驚いたような声を上げる。シンだけは頭痛がしてきたのか頭を抱えながら、はあ、と溜息をつく。もちろん、話をしていたオルガスタも思い付きもなかったというよりは、到底無理な話だと思っていた為に呆然とした表情を浮かべる事しか出来ずにいた。

そんな中でラズリーテは、皆が驚いている意味が分からなくて、きよとん、とした表情で首を傾げている。

「どうして、そんなに驚くんですか？」

「どうしてって……、あのね、リーテ。そんなに簡単な話じゃないんだよ？」

「ラズ……、夢の中に居る存在をどうやって倒すんだ？」

「簡単な事ですよ！ クラウディオさん、ギルバートさん！ 夢の中に入ればいいんです！」

「……いや、待って、リーテ。ちょっと落ち着こう、ね？」

「ラズ。夢の中に入るっていう話がどうして簡単な事になるのかが全く分からないんだけど」

「………？ だって、私は……」

「はい、ストップ。悪い、町長さん。宿屋で部屋を人数分、用意してくれないか？ ナイトメア 夢魔の一件に関しては俺らがどうにかするから」

「は、はあ……」

次々と掛けられる内容にラズリーテは不思議そうな表情で当たり前の事のように言葉を紡ごうとしたが、その前にシンが後ろから抱き締めるようにしつつ、口を手で塞ぐと呆然としたままのオルガスタへと視線を向けて頼むように言う。

オルガスタは理解していない様子のまま頷くと、とりあえずは言われた通りにしようと思つてその場から離れて行く。シンはその様子を見て小さく息を吐きながら、ラズリーテの口を塞いでいた手を離すと呆れたような溜息を吐きながら、視線を下に向ける。

「ラズ。アンタが言いたい事は宿屋で聞いてやるから、自分が『青薔薇』だつて事は言わないでおけ」

「……？ どうしてです？」

「色々と厄介事が起きるかも知れないから、だな」

シンから告げられた言葉が理解出来ずにいたラズリーテであったが、逆らう必要もないと思つたのか了承するように頷く。シンはそれに対しては満足そうに頷きつつも、未だに驚きの表情のままで見ている仲間の姿を見て小さく溜息を吐く。

何で、こんな事をしないと駄目なんだよ。

一番年下であるはずのシンは心の中で文句を呟きつつも、数分して戻つて来たオルガスタの案内で、今日泊まる宿屋へと向かう事にしたのだつた。

眠れない街「ナイトメア」(5)

オルガスタの案内でやってきた宿屋は見事な程に全ての部屋が空室であった為に、これから先の事も考えて三部屋だけ取る事になったのだが、最初の問題がラズリーテと誰が一緒の部屋になるか、という事だった。それだけ言い争いが勃発しそうになったのでクラウドが頼んで一人部屋を一つ、二人部屋を一つ、三人部屋を一つという事で治まる事になった。

とりあえずは、ラズリーテの爆弾発言の真相を確かめなければいけなかった為に一番大きな三人部屋へと全員集まる事になった。それぞれが適当な場所に座りながら、ラズリーテはちょこん、と床に正座をしていた。椅子やベッドに座ればと促したものの、こっちの方が落ち着くから、の一点張りで仕方なく周りが諦める事になった。

「それで、リーテ？ ナイトメア 夢魔を倒すって話だったけど……、本当に出るのかい？」

「はい、出来ますよ！ シンが言いましたよね？」

「……え？ 俺かよ。俺、何か言ったか？」

「もしも、夢の中に入れたら皆さんだったら倒せるって」

「あー……、それは確かに言った覚えがあるな」

落ち着くようにまず、最初に問いかけたのはアンリだった。少しだけまだ困惑した様子で問いかけたものの、ラズリーテは気付いている様子もなく素直に頷けば、満面の笑顔でシンを見る。少々興味

無さそうにしていたシンではあったものの、いきなり自分の名前が出れば驚いたような表情でラズリーテへと視線を向ける。

その後、ラズリーテから紡がれた言葉に、シンは確かに、とばかりに頷く。それを見たラズリーテは嬉しそうな笑みを浮かべるのだが、問題はそこではない。

倒せるか倒せないかの問題以前に、夢の中という手を出せない所に居る相手をどうやって倒せばいいのだろうか。何よりもそれをラズリーテに対して聞きたかったのだが、全く気付いている様子がなく、きよとん、とした表情で首を傾げている。

「……………ギルバート」

「どうした、ネオン」

「あれ、本気で言ってるよね？ 絶対」

「少なくともオレにはそう見える」

「……………いや、誰にでもそう見えるよ」

そろそろ頭が痛くなってきたのか余裕があり、冷静沈着に物事を見て居そうなギルバートにネオンは問い掛けるが返って来たのは極々普通の答え。ネオンは頭痛を抑えるように頭に手を当てながら、はぁ、と溜息を吐く。

ネオンは助けるようにクラウディオへと視線を向けるも、黙ったまま何かを考えているようで声を掛けられる雰囲気ではない。もう一度溜息を吐こうとしたのだが、クラウディオは何かに思い至ったようにふとラズリーテへと視線を向ける。

そして問い掛けようと口を開きかけたものの、その口は躊躇うかのように閉じてしまう。

自分が考えている事は多分、正解だ。彼女は『青薔薇』と呼ばれる薔薇姫であり、神から愛されし娘。その唄が神に届けば、唄に応じて恩恵が授かるのだと言う。

基本的に薔薇姫は薔薇の色に応じた刻まれた唄のみを知っている

という。例えを挙げるのであれば『赤薔薇』の唄を他の薔薇姫達は聴いた事があつてそれを紡いだとしても、その歌声は神には届かないという。色に応じた唄のみが神へと届き、その唄に応じて恩恵を授かる事が出来る。

それはどの薔薇姫も同じだ、と言う結果が出ている。

だが彼女はどの薔薇姫とも違う、特別な『青薔薇』だ。他の薔薇姫と同様、その魂には色に応じた唄が刻まれているのかも知れないが、自分達の認識がもしも、間違っているのだとしたら、どうだろうか。

人々から見放され、神からも見放されたとする『青薔薇』がもしも、どの薔薇姫よりも神が寵愛し、彼女が紡ぐ唄であれば全て、神に届くのだとしたら。

それならば神に歌声が届かない結界の中に閉じ込められ、一人で過ごしていたのだとしたら納得が出来るのだ。それにクラウディオはこの中でたった一人、シユヴァリエの中でたった一人、『青薔薇』の役目を知っていた。

自分の思い至った事が正解のような気がしたクラウディオの表情がだんだんと深刻そうになっていくので、アンリは少し心配になり、ぽん、と肩を叩く。それによりはつとした表情で顔を上げると、間近にあつたのは心配そうな表情をしているアンリの顔。

「大丈夫かい？ クラウ。君がそこまで深刻そうな顔をするのは珍しいね…、何かあつた？」

「え？ あ、ああ…いや、何でも無いんだ。…ごめんね、アンリ、心配を掛けて」

「いや、俺はいいんだよ。仲間の心配をするのは当たり前だしね」

心配そうな視線を向けられたクラウディオは思わず自分の顔を触りながら苦笑を浮かべ、謝罪を口にするのとアンリはどこか安堵した表情に変わりながら、緩く首を横に振る。

深くは問い掛けてはこないアンリに感謝しつつ、クラウディオはラズリーテへと改めて視線を向ける。向けられたラズリーテはきよとん、とした表情で首を傾げるだけで何かを言おうとはしていない。彼女を守るシュヴァリエであるのであれば止めるべきなのかも知れないが、何も知らない人達が居る中で止めるのもおかしい気がして小さく息を吐く。

『いいか、クラウディオ。全てを知っているのはお前だけだ、そして時が来るまで知る事が出来ない仲間達の分までお前は『青薔薇』の全てを守らねばならない。だが、守るという事は決して過保護にしてやる事ではない。肝に免じておけ』

旅立つ前にローズ・シュヴァリエ団長のグレンから言われた事を思い出すと止めそうになる自分を必死に抑え、不思議そうな表情で見えて来るラズリーテに対して微笑みを浮かべると、仲間達へと視線を向ける。

過保護になってはいけない。

それならば、少しぐらいは彼女の自由にさせてやるのもいいかも知れない。今まで一度もあの森の外に出た事すらなかった彼女がやりたいというのであれば、それに付き合ひ、その脅威から彼女を守るのがシュヴァリエの役目と言うものなのだろう。

クラウディオは自分を納得させるようにそう心の中で呟くと、全体を見回して微笑みを浮かべる。

「とりあえずは、リーテに任せようか、皆」

「……え？ 本気？ クラウディオ。アンタが一番最初に止めるかと思っただのに」

「クラウが決めたんだ、それに従うのがオレ達だろう？ ネオン」

「いや、ギルバートは少しは反対しても良いと思うけど」

「まあ、クラウがそれでいいならそれでいいけど……本当に大丈夫

かい？ リーテ」

クラウドディオから紡がれた言葉に最初に言葉を漏らしたのはネオンだった。若干の不満が含まれている事に気付くとギルバートが諷めるように言いはするも、ネオンははあ、と溜息をつきながらポツリと呟く。二人の会話を耳に入れながらもアンリは、最終確認のようにラズリーテへと視線を向けると、もちろん、と言うように頷く。

「大丈夫です！ 今日、夢の中で逢いましょうね、皆さん」

満面の笑顔で言い切られるように告げられると、それ以上、深く追求などする事は出来ず、とりあえず与えられた部屋へと戻る事にする。三人部屋に泊まる事になったのはアンリ、ネオン、そしてシンの三人であったのでクラウドディオとギルバートは先に部屋を出て行き、ラズリーテもそれに続こうとしたのだが、その時、そつと手を引かれる。

少し体勢を崩しながら、不思議に思ったラズリーテが振り向くとそこには少し心配そうな表情で自分を見ているシンの顔がそこにあつた。

「どうしたんです？ シン」

「……………いや、何でもねえよ。夢で逢うんだろ？ 後でな」

「はい、お休みなさい、シン！」

不思議そうな表情で問い掛けて来るラズリーテに何か問い掛けようとしたシンではあったものの、それを飲み込んで掴んだ手を離すと、ぱん、と背中を押す。ラズリーテはニッコリと笑って軽く挨拶をすると軽い足取りで部屋から出て行き、ぱたん、と音を立てて扉が閉まる。

シンはただ、その閉まった扉へと視線を向けていたがその様子を

不思議に思ったのは同部屋の二人であった。

「どうしたの？ シン。アンタが、そんな風な表情になるのは珍しいじゃない」

「……………クラウディオの様子がおかしかったろ？」

「ああ、それには俺も気付いたけど。……………それがどうかした？」

「ラズが何するのか知ってて、それを止めようとしてた。……………つまりは、ラズがしようとする事に反対したって事だろ？ クラウディオが止めようとするぐらいの事をしようとしてるって事じゃねえのかなって思っただけだ。俺の思い過ごしならいいんだけどな」

結局は止めなかったクラウディオの様子を思い出して、シンは自分の希望を込めてぽつりと呟くと与えられているベッドへとぼすんと飛び込む。その様子を見ながらアンリとネオンは顔を見合わせ、互いに若干の不安が宿っている事に気付くと苦笑を浮かべる。

逢って間もない少女が何をしようとしているかなど、自分達には分かりはしなかった。

分からないからこそ、止める術がないし、分かりたいから問い掛けようとしても少女は素直には答えてくれないだろう。答えれば、クラウディオが止めようとしていたように自分達が止める事を知っているから。

シンの希望通りになればいいと思いながら、アンリとネオンもベツトへと潜り込む事にした。

与えられた一人部屋へと戻ったラズリーテは眠る為にベッドに潜り込む事はせずに、そつと窓を開けると風を受ける。もう既に夜は遅かった為に点々と着いていた灯りも一つ、また一つと消えて行くのが見える。

ラズリーテにとってすればそれは初めて見る光景で目を輝かせて見ていたが、ずっと見ている事は出来ないという事は理解していた為に、危険ではない程度に窓縁に座り、空を見上げるとそっと胸元に手を当てる。

自分の歌声を動物達以外に聞いて貰った事はなかった為に、どういう感想を持たれるのかは不安だ。他の薔薇姫達のような綺麗な歌声をしているかも不安になってはくるが、それでも自分がやると言った事なのだからやらなければいけない。それを受け入れてくれた皆の為にもやるしかなかった。

折角だから思いつきり歌えばいい。

薔薇姫として初めて神に捧げる唄が受ける恩恵は、決してこの大陸の為になる事ではないけれど。それでもこの街の人達の為になると知っているから。

すう、と息を吸い込むとゆっくりとラズリーテは唄を、歌い始めた。この唄がどうか神へと届き、この願いを聞き届けてくれるように、と祈りながら。

神よ あなたの愛するローズが

あなたに唄を捧げます

人々を苦しめる悪しきモノから救う為

どうか 私達を 夢の中へとお導き下さい

私は願いを請います

神よ あなたの愛するローズの唄が聞こえたのであれば

どうか この願いを叶えて下さい

私はこの身と唄を

あなたへ捧げましょう…

ふう…、と一息つくとなズリーテは鼓動が速まるのを感じてそれを落ち着ける為に何度か深呼吸を繰り返してから空を見上げ、もう一度祈るようにそつと目を閉じると眠る為にベッドへと潜り込む。上手くいくかはやってみなければ分からなかったけど、上手いくと信じながら疲労もあったのだろう、ラズリーテはすぐにすう、と寝息を立てて眠り始める。

既に皆が眠りについてた為にこの唄を聞いた人は居なかったかも知れないが、たった一人だけこの唄を眠っているというのに聞いてしまったのか、一雫の涙を零していた事に気付いた者はたった一人も居なかった。

眠れない街「ナイトメア」(6)

眠ったという記憶があったというのに、何かおかしい感じがしてふと目を開けてみる。見えたのは先程まで居た宿屋の部屋の天井でも、寝相が悪かったのであれば真つ白なベッドのシーツでもなく、見覚えのない、何も無い灰色の空間だった。

誰もがそんな状況に陥ってばかんと啞然とした表情になっている中で、ラズリーテも目を覚ますと数秒何も理解出来てない様子だったがすぐに理解出来たかのように嬉しそうな笑顔を浮かべる。そして周りを見回すと、シュヴァリ工達の姿も見えたので安心したような表情を浮かべ、そつと胸元で手を組む。

感謝します。

一度も聞いた事のなかった歌声で紡がれた唄を聞き入れてくれた神に最大の感謝を述べながら、ラズリーテはぴくりとも動かない皆の様子を見るようにとことこと近付いて行くと、ひよこ、と顔を覗き込んで行く。

「シン、クラウディオさん、ギルバートさん、アンリさん、ネオンさん。大丈夫ですか？ 夢の中ですよー」

「……………ラズ……………え、マジに言ってるのか、それ」

「はいっ！ だって夢の中で、ナイトメア夢魔さんを倒すんですよね？ その夢の中ですよ、頑張りましょうね！」

全く覚醒出来ずに居るのだが、ラズリーテの顔が見え、名前を呼ぶ声が聞こえ、紡がれた言葉の意味を理解しようとしても出来なかったが、シンは信じられない、とばかりの表情を浮かべながら思わず問い返すと、問い返された意味を分からなそうにしながらラズリーテは当たり前のように頷きつつ、気合いを入れるように言う。

未だに理解出来ないまま、とりあえずは身体を起き上がらせ、周りを見てもどこまでも続いている灰色の世界しかなかったが、ここが夢の中だと言われても全く実感が湧かない。周りには見慣れた顔があり、同じように理解出来なさそうな顔をしているのは分かるし、現実ではないのだろうという事は何となくだけ理解出来るような気がする。

たった一人、こんな状況下に追い込んだ張本人でもあるラズリーテは興味深そうに周りを見回しており、どこか楽しげな笑みを浮かべている。非現実的な事に巻き込まれたようだという事だけは理解出来た為、頭を抱える者も出てきたが、そんな中でクラウドイオだけはどこか心配気な表情でラズリーテへと視線を向ける。

神に唄を捧げ、願いを叶えて貰ったのだろう。

それだけは理解出来るが、果たして本当に何のリスクも無いのだろうかと思う。一般的には知らされていないし、薔薇姫は秘密ばかりで本当の意味で知る者は本人達しか居ないのだろうが、薔薇姫というのは基本、短命だ。長くても二十代後半までしか生きられず、今まで30まで生きた薔薇姫は居ないと言う。

早ければ二十歳という若さで亡くなる者もいるくらいであるのだから何らかの秘密を持っているのだと思うが、彼女達はその事に関しては一切口にしようとししないのだ。人柱としての自覚があるかのように聞いても、答えずに苦笑を浮かべ、誰もが首を横に振るだけなのだと言う。

だからこそ、誰もが薔薇姫と言う存在を崇め、当たり前のように人柱として仕立て上げる。幸せや平穏を得る為には尊い犠牲は当たり前のようにあるだと思ひ、年若い少女達を捧げる。捧げ終わ

れば後は恩恵を受けるだけだ。

何とも悲しく、おかしな世界なのだろうと思う。ローズ・シユヴ
アリエの中でもこういう風に考える者は少ないかも知れないが、そ
れでもクラウディオはそう思わずには居られなかった。そして目の
前に居る自分よりも年若い少女は、当たり前のようにその運命を受
け入れているという事実がとても悲しく感じられる。

「……クラウディオ？ ……クラウ！ どうした」

「え……、あ、ああ、ギル。 ……ごめん、何でもないよ。少しぼ
つとしてみたいだ」

「気持ちはこちらからでもない。とりあえずは、夢の中だと言う事だ
けは理解は出来たが」

「そうだね……」

漸く、それぞれが覚醒し始めた中でクラウディオだけがどこか物
悲しい表情でラズリーテを見ている事に気付いたギルバートは不思
議そうに呼び掛ける。名前を呼ばれたクラウディオははっとしたよ
うに振り返るとほんの僅かに心配を滲ませたギルバートの表情が見
えて、苦笑交じりに謝る。

未だにおかしいという風に思っではいるが、ギルバートはほっと
安堵で僅かに表情を緩ませながら言葉を紡ぐと、クラウディオは小
さく頷く。

「ねえ、ラズ。ここが夢だって事は信じても良いけどさ、どうやっ
て夢魔ナイトメアを探し出すつもりだったの？」

「……………え？」

「……………リーテ。考えて無かったんだね、そこまで」

「う、ごめんなさい、ごめんなさい！ 夢の中に入ればどうにかな
るものだって思っていました。言われるまで気付きませんでした……」

ネオンはざつと辺りを見回して深く考えずに信じる事にしたらしく、楽しいな笑みを浮かべたままだったラズリーテへと気になった事を問い掛ける。問い掛けられたラズリーテは一瞬の内にきよとんとした表情になるとそれですぐに分かったかのようにアンリは苦笑を浮かべながら呟く。

その様子を見たラズリーテは慌てたように二人に対して頭を下げて勢いよく謝りだしながら、困ったような表情を浮かべながらどうしよう、と焦り始める。そんなラズリーテをネオンとアンリはどうにかして宥めようとしている様子を呆れた様子で見ていたシンであったが、ふと何かを感じたように灰色ばかりが続く世界の遠くを見るように視線を向ける。

もちろん、そこには何も無い。変わらぬ灰色が続くだけで、何かが居る様子などない。

気の所為か？

シンは自分でそう納得させようとはしたのだが、それでも夢の中にもきちんとはある風がそれを否定するかのよう自分の身に纏わりついてくる。嫌な気配ばかりがしてシンは警戒心を緩めないまま、ただ一点を見つめ続ける。

そんなシンの様子に気付いたのは、クラウディオとギルバートだった。少し離れた場所に居た為にシンへと近寄りつつ、問い掛けようとしたのだが彼ら二人も何かには気付いたようにシンと同じ方向へと視線を向ける。

「どうしたの？ 皆。険しい表情で…」

「ラズ、安心しろよ。わざわざ、探さなくても目的のヤツのお出ましみてえだ」

「……え？」

「は？ 一体、何を言って……っ!？」

三人の様子がおかしい事に気付いたのかアンリは声を掛けはするが、それには応えずにどこか楽しげな笑みを浮かべたまま、シンが言葉を紡ぐ。だがその言葉の意味が掴めなかったラズリーテは不思議そうに首を傾げ、ネオンは訝しげな表情で詳しく聞こうとするが、その言葉は途中で止まる。

ラズリーテだけは気付いていないかのように首を傾げるが、誰よりもラズリーテの近くに居たアンリとネオンはラズリーテを背に庇うように立つ。それを確認すると、他の面々は現れるだろう存在へと目を向ける。

「あら……、イイ男が揃ってるわね。わざわざ、アタシに逢いに来てくれたのかしら？」

彼らの目の前には黒い霧が集まっていたかと思えば、その霧がゆっくりと無くなっていく中で見えた姿は誰もが目を奪われてしまってもおかしくはない妖艶に満ちた女性がそこに立っていた。ラズリーテは姿は見えず、声だけで判断するしか出来なかったが、声すらも艶に満ちている。

悪夢を見せるという、ナイトメア 夢魔。

物語の中などにしか存在しないとされた為に、その姿は実に多種多様とされ、誰もが想像の中でしか逢った事はないはずだ。一重に夢魔という存在が決まった姿に囚われないというのが特徴的なのかも知れない。

今は偶然に男の方が多かった為に女の姿を取っただけかも知れないし、誰かの頭の中にある理想像が表に出ているだけなのかも知れない。

「……ねえ、アレって、絶対にアンリの想像の具現体でしょ？」

「ネオンもそう思うか。オレもそう思っていた」

「うわっ……ネオンはともかく、ギルまで!? 確かに妖艶に満ちた女性と言つのも惹かれるモノがあるけど、今の俺にはリーテが居るから、俺ではないよ」

「とうか、ラズを引き合いに出すんじゃないよ。でも、どっちにしろ、アンリにしかあり得ない」

「だから違つて! クラウも何か言つて……」

「んー……まあ、いいんじゃない? あんな感じの女性はあまりお目に掛かれないからね。あーゆう諸税が理想像でも……」

「だから、違つっ!」

目の前に出てきたナイトメアの姿を見て最初に感想を漏らしたのはネオンだった。明らかに呆れを含んだ声で横目でアンリを見てみると、ギルバートも頷きながら同意をする。さすがに予想外だったのかアンリは慌てて反論するが、その反論すら聞いていないかのようにシオンが畳み掛ける。

もちろん、あらぬ誤解を受けそうだったアンリは唯一話に加わって居なかったクラウディオへと助けを求めるのだが、クラウディオから返つて来たのは変な慰めの言葉であり、全力で否定する。当本人である夢魔と会話に加われなかったラズリーテはぽかん、と呆気に取られる事しか出来ない。

そんな二人の様子になど気付く様子もなく、アンリはくるっと勢い良く振り向くとがしつとラズリーテの肩を掴む。

「え?」

「いい? リーテ。俺は君のシユヴァリエに選ばれた時から、君に全てを捧げているから。絶対に、アレが俺の理想像じゃないから、安心して」

「……………え? え?」

真剣な表情で一息に言い切ったアンリの言葉にラズリーテはどう

反応を返すべきかも分からずに、困惑した表情ではあるが驚いているのは一目瞭然だった。そんなラズリーテを見てアンリが走り過ぎたかな、と思いつつも分かって欲しい気持ちは変わらなかつたのでじっと見たままだ。

ラズリーテはどう返すべきかも分からず、誰かに助けを求めようと口を開きかけた時だったろうか、ごっん、といい音が聞こえて来る。

目の前で起こった出来事にラズリーテはぼかん、とした表情になり、叩かれたのだらうアンリは頭を抱えながらその場にしゃがみ込む。アンリの後ろに立っていたのはネオンであった。少しだけ不機嫌そうな表情で力いっぱい叩いたのだらう手をひらひらと振っている。

「い、いきなり、何を……っ」

「あのね、ラズを困らせてる君が言う台詞じゃないでしょ。僕は天誅を下しただけ」

「天誅って……ネオン！　　というか皆も見えてたなら止めてくれてもっ……っ」

痛みを堪えて何が起きたのかを把握しようとして口を開いたアンリの言葉を途中で遮り、ネオンは手をひらひらとさせたまま、キツパリと当たり前のように言い切る。さすがに反論をしなくなったアンリは怒鳴るように口を開きはするも、その大声が頭まで響いたのか痛そうに顔を歪めつつ、恨みがましい視線で黙って見守っていた面々へと目を向ける。

今回ばかりは全員、ネオンに賛同していたのかその視線を向けられても言い訳をする様子は見せない。味方が居ない事に気付くとアンリはがくつと肩を落とす事しか出来なかつた。

その様子を黙って見ている事しか出来なかつたナイトメア夢魔ではあつたが、はあ、と盛大に溜息を吐けば、自然に誰もそちらへと視線を向け

る。

「……アナタ達、どうやって夢の中に入って来たのかを教えて欲しい所だけど……。折角姿を見せたアタシの存在を無視しないでくれない？ どう見てもそっちのお嬢さんより、アタシの方が魅力的じゃない」

「同意はしない」

「なっ……!？」

「嘘の魅力程、滑稽なモノはないとオレは考える」

「……うっわ、ギルバートってこういう性格だったか？」

「うーん……ギルの場合は、思った事を口に出してるだけだから何とも言えないかな」

夢魔から紡がれた言葉に、ギルバートは当たり前のようにキツパリと否定する。即答と言わんばかりの速さであった為驚きに目を見開く夢魔の事など気にしていないかのようになり、ギルバートは言葉が続けるように当たり前のように言い切る。その様子を見ていたシオンは驚いたように目を見開きつつ、思わずクラウディオへと視線を向けて問い掛けると、クラウディオは困ったよう表情で知っている事を返す事しか出来なかった。

ギルバートから告げられた言葉は、ナイトメア夢魔のプライドを傷付けたように怒気が溢れだしているのが目に見えて分かる。とは言っても言った本人は思った事を口に出しただけなので、全く気付いている様子はなく、巻き込まれた彼らだけが、はぁ、と溜息を吐く事しか出来ない。

「……あーあ、どうすんだよ。さっさと倒して、終わりにするんじゃないのか？」

「僕も出来ればそうしたかったかな……、夢と言つのはいずれは覚めるからね。時間が限られているし」

怒気が溢れだしている夢魔を見ながら、シンが面倒そうにポツリと呟くとクラウディオも苦笑を浮かべながら同意する。

とりあえずは、現状を打破しなければいけない。

結局はそういう結果に導かざるを得なかったのだった。

眠れない街「ナイトメア」(7)

「どうすんだよ、ギルバート。アンタが怒らせたんだから、アンタが責任持つて倒すんだろっな？」

「……………オレの所為なのか？」

「いや、気付けよ」

目の前に居る怒気を溢れださせている夢魔を見ながら、シンは呆れたような声でこういう状態にした張本人へと声を掛ける。声を掛けられたギルバートは全く理解している様子もなく、僅かに首を傾げて聞き返せば、シンは思わず突っ込みを入れてしまう。

突っ込まれてギルバートは自分の発言を思い返しはするも、更に分からなくなっただかのように首を傾げたままだ。それが目に見えて分かる為にシンは頭を抱えてはあ、と深く溜息を吐きつつも、苦笑を浮かべているクラウディオへと視線を向ける。

「おい、クラウディオ。俺は参戦しないからな……………こんな気持ち悪い風、使いたくない」

「あ……………やっぱり？ そうだよな。ギルは参戦決定、僕も決定で……………アンリとネオンは？」

「俺も一応はさせて貰おうかな。名誉挽回で、リーテに良い処を見せたいしね」

「うわ……………、なら僕もしとく。アンリばかりに良い思いさせる訳にはいかない」

「という事はシン以外は全員参戦、か。じゃあ、シン？ リーテを

頼むね」

「はいはい」

唯一、会話についていけなかったギルバートは自分を指差しつつ、クラウディオに確認を求めようとすると苦笑交じりに肯定するように頷かれた為に、良く分からなそうにしながらも応戦の体勢に入る事にした。

アンリとネオンも一旦、ラズリーテから離れて他の二人並ぶ。それと入れ替わるようにシンは後ろに下がって来て、ラズリーテの隣に立つ。全く話についていっていなかったラズリーテは不思議そうな表情で前に立っている四人とシンを交互に見る。

その意味が分かったシンは苦笑を浮かべつつも、「見てろよ」とだけ言う。ラズリーテはこくり、と素直に頷いてこれから始まるのだろう。戦いの様子を見る事にした。

それぞれが応戦するように手に持った武器は、多種多様で、ギルバートは一本の槍、クラウディオは銃、アンリは刀、ネオンだけは何も持っていない。どうして持っていないのかが分からずにラズリーテはただ、首を傾げる事しか出来ず、シンはどこか楽しげに笑みを零す。

実力は知っている。

どうして他の薔薇姫のシュヴァリエに選ばれなかったのか、と疑うくらいに若いながらも実力は申し分ない。『ローズ・シュヴァリエ』の中でも必ず上位の腕前を持つ者ばかりが集まっている。

とは言っても性格などからそれが発揮される場面はなかったし、こういう風な実践もほとんどなかった為にどこまで通用するのかわからないが、シンは何にも問題は無いだろう、と当たり前のように確信している。

信じている、というよりは、ただ実力を知っているから、問題は無い、と素直に思える。これで負けたら、自分の認識が甘かった、ぐらいに捉えておけばいい。

シンが全く動こうとしない事だけは分かったラズリーテは、安心して任せられるという事なのだろうと思うと、初めて見る戦いへと集中する事にする。

「……でもさ、一つ言わせて貰えるなら四人も必要無くない？」

それぞれの武器が出たのを確認してから、ネオンはぼつり、と思いきや浮かんた事を口にする。実戦経験というのは確かに少ないが、目の前の夢魔ナイトメアの力量は分からないが四人も出る必要が無いような気がしてならなかったのだろう、ざつと全員を見回す。

ネオンの言葉を聞いた残りの三人は思わず、顔を見合わせてから怒気を露わにしたままの夢魔ナイトメアへと視線を向ける。

強ければ参戦すればいいし、弱ければ手伝う必要もない。そう判断出来た為か、クラウディオとアンリはぼん、とギルバートの肩を叩く。

叩かれたギルバートは少しの間無言で居たものの、自分か？と言わんばかりに指差せば、三人は同時に頷く。

「あそこまで怒らせたのは君みたいだし、ギル。君の力量なら早々、時間は掛からないと思うよ。まあ、リーテに良い所を見せられないのは少し悔しいけどね」

「なら、お前がやればいい、アンリ」

「責任は取りなよね、ギルバート」

「危なくなったらすぐに加勢するし……リーテの身体も心配だから、早めに終わらせて欲しいな」

アンリから紡がれた言葉には思わず反論するギルバートであったが、続いたネオンとクラウディオの言葉にははあ、と溜息を吐く。早くに終わらせて欲しいならば全員でやった方が早くなるような気もするが、それを今言っても誰も聞き入れないだろうと思うと、ギ

ルバートは諦めたように息を吐く。

良くは分からないが、あそこまで怒らせたのは自分らしいし、その責任を取るべきなのもやはり自分なのかも知れないと思うと一歩前に出て、ナイトメア夢魔と対峙する。

「あら……、貴方が相手をしてくれるの？ ……殺してしまうかも知れないけど、構わない？」

「出来るのであれば、好きにしる」

「言ってくれるじゃない……！」

ナイトメア夢魔は、ギルバートが相手をするのだと分かると怒気と同じぐらいに殺気を出しつつも、挑発するような言い方に更にそれは跳ね上がる。もちろん、ギルバートからしてみれば思った事を口にしただけなので挑発したつもりは全くない。

その様子を見ていた他の面々は、呆れたように息を吐く。

鍛錬の時もそうだが、ギルバートの言葉は相手を激情させてしまう事が多い。それ故に絡まれる事が多く、それ故に鍛錬の時間は誰よりも多かった。それは誰もが知っている事だし、本人も自覚はしているだろう。

ただ、相手を何故怒らせてしまうのかは未だに理解出来ていない様子で不思議そうな様子で首を傾げている姿を見ると、溜息しか出て来ないというのが本音だった。それでも相手が先に動けば、ギルバートはすぐに応戦の体勢になる。

ナイトメア夢魔は周りの闇を集め、いつの間にか手には一本の黒い剣が握られていた。ギルバートは、少しだけ感心した様子でそれを見ていたがすぐにも自分の近くまで来て、ナイトメア夢魔が振り落とした剣を槍で受け止める。

金属同士がぶつかり合う音が聞こえた時にラズリーテはほっと安心したように息を吐きはするも、すぐにも続けて金属同士がぶつかり音が響き続ける。慌てたようにラズリーテはそちらへと目を向

けるも、^{ナイトメア}夢魔の動きが早かった為に目で追う事が出来ない。ただ、音が聞こえているという事はギルバートは全てを受け止めている事だという事だったので小さく息を吐く。

そんな様子のラズリーテを見て隣に居たシンは小さく笑みを零す。

「ラズ、アンタ、心配し過ぎ。……あれなら、ギルバートの方が早い」

「……え？」

「ギルバート、剣が振られると同時に反応してるから、完璧に見極められてる。……すぐにも決着が付くだろ」

隣のシンから告げられた言葉に、ラズリーテは、ぼかん、とした表情になる。自分は全く目で追う事が出来ないというのに、シンはもちろんの事、残りの三人も追えているというのだろうか。

全く次元が違うような気がしてラズリーテはぼかん、とした表情のままで繰り返されている戦いの方へと視線を向ければ、シンが言った通りに既に勝敗が付く所だった。

それは一瞬の間だったのだろうか。^{ナイトメア}夢魔が次の一撃を振ろうとした時、それよりも先にギルバートは持っていた槍を^{ナイトメア}夢魔の身体へと向け、貫く。これに驚いたのはラズリーテというよりも、攻撃を仕掛けていて、優勢だと感じていた^{ナイトメア}夢魔の方だったろうか。

貫かれた身体はゆっくりと消え始め、握られていた剣はふわり、と周りの闇に溶け込むように消える。何かを言おうとした^{ナイトメア}夢魔であったものの、何か言う前にその姿は消える。ギルバートはそれを見届けてから自分の方へと槍を引き寄せ、汚れていない事を確認すれば小さく息を吐く。

「……夢の中で良かった。汚れずに済んだ」

「あのさ、ギル。……敵を倒した感想が、それ？」

「大事な事だろう、アンリ」

「いや、そうだけどさ……何かおかしいと思うよね？ クラウ？」
「僕はギルらしくて良いと思うよ？ とりあえずは無事に決着が付いて良かったよ」

「とうか、どう考えてもギルバートが勝つのが目に見えて分かったでしょ。まあ、アンリだったらギリギリの戦いだったかも知れないけどね？」

「……………ネオン。それは俺に喧嘩を売ってる？」

「まさか。アンタ相手に喧嘩を売るような面倒な事しないよ、馬鹿にしないで」

「あ……………ほらほら、アンリもネオンも、喧嘩しないの」

消えてからギルバートは槍を全体的に見終えて安堵の息と同時に安心したように言葉を吐く。それを聞いたアンリは苦笑交じりに聞きはするも、ギルバートは至極真剣な表情で言う。アンリはどう言ったらいいか分からなくなったのか助けを求めるようにクラウデイオに同意を求めるも、クラウデイオは微笑みを浮かべながら簡単に纏めてしまう。

その話を聞いていたネオンはぽつり、と呟くように言えば聞こえていたアンリはもちろんの事、若干身体を震わせながら確認するよりに聞くのだがネオンはそれが真実だと言わんばかりにキツパリと言いつつ。今すぐにも戦闘態勢に入りそうだったアンリを見たクラウデイオは苦笑を浮かべながら、二人を諫める。

あまりにもあっさりと終わってしまった^{ナイトメア}た夢魔退治にラズリーテは呆気に取られた表情しか出来なかったが、隣に居たシンは仲間達四人を見てふつと僅かに笑みを零す。

彼らは努力をし続けていた。いつか仕えるだろう、薔薇姫の為に腕を磨き続けていたのだ。その努力を嫌という程見せられていたし、この程度であれば簡単に終わっても誰も不思議がらない。

守るべき存在である『青薔薇』が何をして自分達を夢の中に連れて来たのかは分からないが、無事に全てが終わったのであればそれ

で良いのだろう、と思う。

「……そーいや、ここは夢魔ナイトメアが作った世界なんだろう？ その主が居なくなつたつて事は、どうなるんだ？」

「壊れます」

「……………え？」

ふと疑問に思ったようにシンがラズリーテに問い掛ければ、ラズリーテはきよとん、とした感じに首を傾げはするもすぐにニッコリと笑つて当たり前のように言い切る。その言葉に呆気に取られたのは問い掛けたシンだけではなく、言い合いをしていた残りの四人もだった。

「壊れるつて……、え？ 壊れたらどうなるんだ？」

「……………どうなるんでしょうね？」

「ラズ！？」

「リーテ！？」

困惑しながら更にシンは問い掛けるも、ラズリーテは微笑んだまま、きよとんと首を傾げて曖昧な言葉を返すだけだ。さすがに慌てて五人はラズリーテの名を呼ぶも、ラズリーテは何か言葉を返す事はしなかった。

どうにかして聞き出そうと更に言葉を続けようとしたその時だつたらうか、全員の視界は真っ暗に染まる。ここで全員の意識が途切れてしまったのだ。

眠れない街「ナイトメア」(8)

「あれから1000年が経って……遂に、『青薔薇』が世に出て来てしまうのですね」

城を囲むように建てられている一本の塔に住んでいる『白薔薇』ローズ・ヴァイスは、どこか哀しげにぼつりと呟きを漏らす。今、この場には残りの薔薇姫である『赤薔薇』ローズ・ルージュ、『黄薔薇』ローズ・イザベラ、『黒薔薇』ローズ・ノワール、『紫薔薇』ローズ・リラが居る。一週間に二、三回程交流を兼ねてお茶会が開かれている。

この時ばかりは彼女達を護る任についているシュヴァリエも部屋の中に入って来る事はなく、薔薇姫達だけでのんびりとした時間を過ごす事が出来る。ルージュやイザベラはお菓子に夢中になっており、ノワールは黙ってお茶を呑み、リラはそんな様子を微笑ましくに見ていたのだがヴァイスが呟いた言葉に一気に静まりかえる。

昨日の夜だったろうか。

聞き覚えのない唄が、歌声が響いて来た。だけど、その歌声が指し示す内容はたった一人の薔薇姫にだけ許された事だとすぐに理解したからこそ、ヴァイスは表情を曇らせ、呟く事しか出来なかった。薔薇姫に受け継がれている記憶には、100年前から始まる。同じ色の薔薇姫の記憶しか受け継ぐ事は出来ないが、それでも共に行動していたからこそ、何が起こったのかは覚えている。だからこそ、聞こえてきた歌声はとても嬉しくもあり、とても悲しくもあった。

「…………『青薔薇』、か。…………アタシは、100年間ずっと見た事がねえんだけどさ、どんな姫な訳？」

「んー…………、お姉ちゃん。多分、誰も知らないと思うよ？ ずーつと、人目を避けるように生きてるみたいだし」

ルージュが繰り返すように呟いてから、ふと好奇心もあつたのだろう全体を見回しながら問い掛けるとイザベラは記憶を辿るようにしつつも、僅かに苦笑を浮かべながら答える。返って来た答えにそうなのか？と言わんばかりに他の面々へと視線を向けると、誰もが同意するように頷く。

薔薇姫であるからこそ、保証されている生活だというのに、『青薔薇』はそれすらも受けられず、ただ虐げられるように生きているというのだろうか。決して誰かに感謝される訳でも、ただ、その時が来るのを黙って待ちながら、生き続けて、きたのだろうか。

そう思うとルージュは、どこかやるせなさを感じたのか苦々しい表情になる。イザベラはどこか哀しげな表情で、ギョツとルージュに抱き付く。

「…………姉さん」

「ええ、分かっていますよ、ノワール。…………どれだけ、わたくし達が憂いても運命は何も変わらないという事は」

「変わらない運命の輪に繋がれたまま…………生き続ける事しか、出来ないのかな…………」

「リラ…………」

ヴァイスの悲しみを和らげたいと思ったかのようにそっと名前を呼びながらノワールは寄り添いながら、ヴァイスは微笑みを浮かべて小さく頷く。そんな二人のやり取りを見ながらリラがぼつりと呟くと、誰もが何も言えずに黙るしかなかった。

少しだけ気まずい空気が流れていた時だったろうか、階段を登っ

て来るような音が聞こえ、薔薇姫達はそちら視線を向ける。基本、このお茶会が開かれている時はシュヴァリエは塔の唯一の出入り口でもある場所を護ってくれている。つまり、登って来る時は余程の緊急事態の時か、それとも彼らが通して信頼に値している人物ぐらいか。後は不審者、ぐらいだ。

そのどれに当てはまるかが分からずに薔薇姫達は警戒を怠らなかつたが、カチャ、と扉が開き、その隙間から見えた姿にはとつとしたような表情になり、慌てて居住まいを正そうとするが入って来た客人は苦笑を浮かべながらそれを手で制する。

「そのまま構わないって。悪かったな、折角のお楽しみ中に」

「いえ。陛下であればいつでも歓迎致しますよ」

「ありがとう、ヴァイス。……それで、どうした？ 少しでも気がまですそうな空気だった気がしたけど？」

客人 エリファレイトは少々申し訳なさそうな表情をしながら軽く謝罪の言葉を言いはするも、ヴァイスはふわり、と微笑みを浮かべて招くように言葉を紡げば空いている椅子へと座るように促す。それに対してお礼を述べ、促された通りに椅子に座れば全体を見回しながら少々不思議そうな表情で問い掛ける。問い掛けられた内容には誰も答えられずに口を閉じてしまい、エリファレイトは更に不思議そうな表情で首を傾げる。

とりあえずは、話してくれそうなヴァイスに目を向けはするも中々言いつらい事だったのか口を開いてはくれなかった。エリファレイトは問い掛けなかった方が良かったかな、と思った時だったろうか。誰もが口を開く気配がなかったが、その中でルーージュだけが口を開く。

「『青薔薇』の事だよ、陛下。……向かせたんだろ？ シュヴァリエ」

「……………ああ、そうか……………」 『青薔薇』の唄が、響いていたのか？
「…ああ。ここに居るより、誰の唄声よりも響いてたさ」
「そうか……………、そう、なのか」

言われた内容ですぐに想像がついたのか、ただ気になった事だけを問い掛けるとルージユはたった一言、当たり前のように紡ぐそれが全てを確信させる言葉でエリファレイトは何も言えずに黙る事しか出来なかった。

『青薔薇』のシュヴァリエ達が、薔薇姫を連れて戻って来るまではまだ時間がある。その間に様々な事に遭遇し、様々な事柄と向き合う事になる。

本来であれば、別に決められたシュヴァリエだけで向かわせなくても良かったのだ。最短時間で呼びたいのであれば、それなりの方があつたり、それを選んだ方が良かったという事は分かっていた。それでも、主にグレンが頼み、そのグレンの願いを聞き届けるようにマクシミリアンに言われ、許可を出した。

危険な事に巻き込まれるかもしれない。最悪、命を落とす可能性だってあるし、全滅する可能性もあるだろう。それでも、こうしなければいけないのだ、とグレンは言った。そうしなければ、何も変えられないから、と。

「ねえ、陛下。……………陛下は、落ち込まなくていいんだよ？」

「イザベラ？」

「陛下、いつも言ってるよ？ 『何とかなる』って。だから、今回も 何とかなる よー！」

「……………ふふ、そうですね、陛下。あのお方は寛大な方ですから、大丈夫ですよ。少しぐらい遅くなっても問題ありませんよ」

「姉さん……………。少し、無責任な気が……………」

「そうでしたか？」

「……………でも、陛下。陛下やグレン様、マクシミリアン様が私達の事

を考えて下さってくれている事は、知ってるから……」

「ヴァイス、ノワール……」

「……『青薔薇』もきつと分かってくれますよ……。陛下がお優しく
て、考えて下さった事だつて……」

「リラまで……。……。ありがと、な」

少しだけ落ち込んだ表情をしていたエリファレイトの顔を覗きこ
みながら、イザベラがニッコリと笑いながら言葉を紡ぐ。それに続
くようにヴァイス、ノワール、リラも微笑みながら言葉を紡げば、
エリファレイトはここで漸く、励まされているのだという事に気付
けば、苦笑を浮かべつつも礼を述べる。

誰よりも大変なのは、『青薔薇』であり、『薔薇姫』達だと知っ
ているというのに、彼女達に励まされてどうする、と思いつながらエ
リファレイトは、また楽しく賑やかなお茶会へと戻った薔薇姫達へ
と視線を向けて、ふつと微笑みを浮かべる。

彼女達を、人柱として仕立て上げる事しか生きる事が出来なく
なってしまった、『エバーガーデン』の民達。全てを与えてくれる
『薔薇姫』を母のように、恋人のように、心から慕うのは当たり前
の事。そしてその裏で、そうする事でしか生きられないから、祭り
上げるしかないのだ、と諦める心もあるのだろう。

どうにかしたいと思っても、どうにも出来ないを知っているから
この世界を好きなように弄る事が出来る神という存在が居る限り。
そしてその神に愛された『薔薇姫』という存在が居なかつたら、こ
の大陸は、もう既に、滅びていただろう。 100年前に。

(……全てが、上手くいくなんて樂觀視はしない。それでも、僅か
な希望を見出すくらいはいいだろう？ グレン、お前が選び、マッ
クス、お前達が育て上げたシュヴァリエに)

果たして彼らは、絶望となりえるのか、それとも希望となり

えるのか。

エリファレイトは決して分からないだろう疑問を考える事を止め、薔薇姫達のお茶会へと混ざる事にしたのだった。

おやすみなさい お眠りなさい

薔薇の香りに包まれ 薔薇姫の唄に耳を傾け

ふと、シンは唄声が聞こえて目を覚ます。頭がぼーっとするものの、辺りを見回してみれば見えたのは昨日与えられた部屋の中で、自分はベッドの中に居て、アンリ、ネオンもベッドの中で眠っている。夢の中へ行っただという記憶はあるが、どうやって戻って来たのかが定かではないし、起きたばかりで上手く頭が働かない。

それでも動かなければいけないと思ったのだろう、とりあえずはベットから足を降ろして座るような体勢になりながら、起きた要因である唄が耳へと届く。

布団の中へとお入り

もう 何も怖がることはないから ゆっくりとお眠り

「…………ラズ…………？」

まだ、ハッキリとしていない頭ではあったが、紡がれる歌声には聞き覚えがあったのでゆっくりと名前を紡ぐ。とは言っても同じ部屋ではないし、聞こえているはずもないと言うのは分かるがそれで

も聞こえて来る歌声が、とても優しくて。とても、安心出来て。

まるで、本当に母に抱かれているような感覚に陥り、シンはふらりと立ち上がると眠ったままの二人を起こさないように立ち上がると部屋を出る。そしてラズに与えられている部屋へと向かおうとしたのだが、その部屋の前で扉を開けようとはせずに壁に背を預け、立っている仲間の一人がそこに居た。

唄に耳を傾けるように目を閉じながら、軽く顔を俯かせ、腕を組んでいたのは　クラウディオだった。ここからでは良く見る事が出来ないが、ほんの僅かに泣きそうな表情だったのは、間違えないだろう。

声を掛けるべきか否か迷ったものの、廊下に出てしまったし、ラズリーテに逢いに行こうと思ったのだから彼に近寄るのは決まっているので、声を掛けるしかないと思ったのかシンはゆっくりと近付きながら口を開く。

「クラウディオ」

「……シン？　早いね、おはよう」

「ああ……、はよ。……クラウディオも、ラズの歌声で起きたのか？」

「……とても優しい歌声が聞こえてね、リーテが唄っているのは分かっていたし、この歌声に包まれながら寝たいと思ったんだけど」「けど？」

「どうしてかな……、胸が締め付けられるように、苦しくなつて。リーテに逢おうと思ったんだけど、気持ち良さそうに唄ってるから声を掛けるのも憚れてね。終わるまでここで待っていようと思ったんだよ」

疑問に思った事を問い掛けたシンではあったものの、クラウディオはゆっくりと顔を上げ、苦笑を浮かべながら促されるままに言葉を紡ぐ。その言葉を聞いたシンはどこか納得したように頷くとクラ

ウディオの隣に立って、同じように壁に背を預ける。

また朝が来て 新しい日が始まるまで

神の意思が あなたを起こすまで 今はゆっくりとお眠りなさい

また 一日を頑張って生きられるように…

唄が終わったのだろう、ふう、と部屋の中から息を吐く音が聞こえる。こもりうたを紡いでいたからだろうか、外からも中からも拍手が聞こえる事はなかったが、見なくても彼女が嬉しそうに微笑んでいる事だけは予想が出来た。

今、きつと街の人々は漸く、穏やかな眠りにつく事が出来ているだろう。悪夢に魘される事も、怯える事もなく、ゆっくりと眠りにつく事が出来ているはずだ。今日ばかりはゆっくりと眠って欲しいと思う気持ちは彼女と同じなので、特に文句を言うつもりはない。

「……クラウディオ？」

「あ、ああ……うん。……懐かしい気が、してね。不意に泣きそうになるよ」

「……」
「僕はリーテに逢うのは止めておくよ。後で買い物に行かないといけないし……、その時に逢う事にするよ。また後でね、シン」

特に何も言おうとはせず、動こうとしなかったクラウディオを不審に思ったのかシンは名前を呼ぶと、クラウディオははっとしたような表情になり、ぽつりと呟けば軽くひらひらと手を振りながら

与えられた部屋へと戻ってしまおう。

シンもどうするか悩みはするも、クラウディオの言う通りに後で逢うのだからその時でいいか、と思うと物音を立てて気付かれる前に部屋へと戻る事にしたのだった。

第一幕エピローグ 母のこもりづたのようぞで

ナイトメア
夢魔が居なくなつたという事で、街も元通りに戻つたらしく、少しずつだが活気に溢れていた。数日の間は、今までの分まで眠るかのようにはとんの者が数日間はずつと眠りについていた程だ。その為、ラズ達は当初の目的でもあつた買い物を済ませる事も出来ずに、数日の間、のんびりとした時間を送っていたのだが、漸く、今日、店などが再開すると言うので買い物に出ている。

元々が街道から外れた街でもあるし、旅人などの休息所になつていたのだらうこの街に改めて訪れた旅人達がもう安心して大丈夫だ、という話を流せば、多くの人が立ち寄るようになるだろう。ラズリーテは多くの人がここまで居るのを見た事がなかつた為に目を輝かせ、物珍しさ故にきよるきよると辺りを見回しながら、はしゃいでいる様子だ。そんなラズリーテの手を取って引つ張つたのは、アンリだつた。

「リーテ。とりあえず、服を見に行こう？ 君に似合う服を見繕わないとね」

「私はこのまんまでもいいですよ？」

「リーテ！ いいかい？ 女の子と言うのは綺麗で居ていいんだ。可愛い格好をして、笑顔を浮かべてればそれだけで男の幸せに繋がるんだからね」

「はあ……」

「アンリ。前も言つたけど、アンタの言い分はどうでもいいから。それより、全くラズが意味分からなそうにしているから」

「いいや、これだけは俺は譲れないね。丁度いい、ネオンも行くよ」
「は？ ちょ、ま……っ！」

正面から向き直ってアンリは真剣な表情そのもので必死に言葉を紡ぎはするも、ラズリーテはどう返事をすべきか分からずに僅かに首を傾げるだけだ。そんなラズリーテに助け船を出すようにネオンは口を挟みはするも、今のアンリにはそれだけでは止まらなかつたらしく、空いているもう一方の手でネオンの手を取ると強引に二人を引っ張るように歩き出す。ネオンは止めるように言葉を紡ぎはするも、あまりにも強く引っ張るもので、逆らう気すら起きない。

そんな三人の様子を見守っていたのは、クラウディオ、ギルバートであり、シンは半ば呆れたように見送っていた。何故本人が乗り気ではないというのに、あそこまでアンリが真剣になれるのかが分からない。

分かりたいとも思わないが。

シンは、はあ、と溜息をつきながらざっと辺りを見回す。活気が出ているし、見える範囲の人々の顔色もとても良くなっている。夢魔トメアの所為でゆっくりと眠る事すら出来なかつたのだから仕方ないと言えは仕方ないのかも知れないが、それを解決したのは良かった事なのかも知れない。

それに、多分、街の人々がゆっくりと穏やかな気持ちで眠れたのはラズリーテが欠かさずに唄っていたこもりうたのおかげなのだろうと思う。決して大きな声ではないというのに、それは街全体に伝わっていたかのように、とても、安心出来て眠る事が出来たと思う。ラズリーテ本人はそれには全く気付いていないらしく、何故唄っていたのか、と聞いても「唄いたかったからですよ？」と微笑みを浮かべながら返すだけだった。深く追求してもこれ以上の答えは得られないと思つたので、追及する事はしていない。

本人には追及はしなかったが、それでも気になる事が一つだけあった。ラズリーテの前ではいつも通りを装っているクラウディオが、

どこか心配そうな視線でラズリーテを見ているという事だ。いつもと変わらぬラズリーテの姿を見ては、安心した表情になっているのが分かる。

「……クラウディオ」

「ん？　どうかした？　シン」

「……………いや、何でもねえ。それより、あれ、放つて置いていいの？」

「うーん……、ネオンも最終的には加わりそうな予感がするから三人で放つて置くのは少し危険、かな？　ギル、良ければだけど、あの三人の事、お願いしても良い？」

「構わない。特にする事もないからな」

シンは問い掛けようとはするが、いつも通りに微笑みを浮かべて振り返ったクラウディオの姿を見て自分が望んでいる疑問の答えなど返っては来ないだろうと思うと僅かに横を振った後に、もう既に姿が見えなくなり掛けている三人を軽く指差す。クラウディオは少々不思議そうな表情はしていたが、指差された方向を見てもっとも可能性が高い事を予想すると苦笑を浮かべれば、近くに居たギルバートへと声を掛ける。

つまりは子守りを任されたようなモノなのだが、ギルバートはあっさりとした態度で了承すると姿が見えなくなる前に、と言わんばかりに三人の後を追うように人込みの中へと紛れていく。見失いはしないだろうが、万が一の可能性もあるのでこれで安心出来るというものだ。

ギルバートの後ろ姿を見送っていた残ったクラウディオとシンであつたが、ふと後ろから声を掛けられたような気がして振り返ると、そこには町長でもあるオルガスタ「ヒューズがそこに居た。

「ローズ・シュヴァリエ様。……この度の事は、本当にありがとう

「ございます。街に活気が戻ったのも、全て皆さまのおかげです」

「いいえ、民の為に働くのもシユヴァリエとしての仕事ですし…、無事に解決出来て何よりでした」

「はい、本当にありがとうございます。」

ナイトメア
「夢魔が倒されたその日

から悪夢を見なくなり、皆もぐつすり眠れるようになりました。」

「ここ数日に響いていた、あの歌声のおかげで誰一人、怖がる者も居なく、夜に眠る事が出来たようです」

「……………そうですか」

「まるで、母の腕の中で聞いたこもりうたのようだ、と。母の温もりを感じながら眠れて……、懐かしさを思い出しました。どなたが唄って下さっていたのかは分かりませんが、もしも知っておられる方ならば、お礼を伝えて下さいませんか？」
「母のこもりうたをありがとう」と。あんなにも安心して眠れた夜は、久しぶりでした」
「ええ……、必ず伝えておきましょう。きっと喜ぶと思いますよ」

オルガスタは、深く頭を下げてもう一度礼を述べると溜まった仕事があるという事からすぐに去って行ってしまふ。対応をしていたクラウディオはその姿を見送っていたが、オルガスタの言葉を聞いていて、僅かに目を伏せて俯く。

母のこもりうた。

もう思い出せるはずもない昔に聞いたこもりうたを、彼女の歌声に感じたというのだろうか。優しさや暖かさ、何よりも深い愛情を、感じたのだろうか。彼女には自覚がなくても、それだけの、力を使ったのだろうか。

見る限りでは何の問題もないようなので安心はしているし、そのおかげで街の人々が元気になったのであれば彼女も嬉しがっているだろう。その証拠にいつも笑顔を浮かべているのだから。

それでも、心配が尽きないのは、上司の言葉が頭の中で響き続けているからだろうか。クラウディオはギュッと手を握り締めながら、どこか苦しげな表情になったのに気付いたシンは名前を呼ぼうと口

を開こうとしたのだが、その前に、また後方から名前が呼ばれる。

「おい、クラウ！ シン！ 俺の見立てに間違いはなかったよ。リーテは、磨けば磨く程、輝く女の子だ」

「……誰にでも言ってるくせに」

「ネオン、俺は素直な感想を女性に告げるだけだよ。ただ、リーテは……俺の予想を遥かに上回っているけどね」

「ふーん？ まあ、今回ばかりはアンリに同意してあげるよ。ねえ、ギルバート？」

「……そうだな。今回だけはアンリに感謝してもいい」

「ばかり、とか、だけ、とか……失礼だなあ、君達は」

「あ、あのっ……」

「ん？ ああ、リーテは二人に見せておいで。きっと驚くと思うから」

「は、はあ……。その、シン、クラウディオさん……似合って、ますか？」

名前を呼ばれた二人はゆっくりと振り返るとそこには、ラズリーテの服を選びに行っていた二人と見守る役目を担っていたギルバートの姿が見える。満足そうな表情をしているアンリを見て呆れながらも同意するネオンとギルバート。着替えさせられたらうラズリーテの姿が見えず、声だけ聞こえた為に二人は不思議そうな表情で首を傾げる。

ラズリーテはどうするべきかも分からずに、アンリに声を掛けたのだが自慢したくて仕方なかったアンリはぼん、と背中を押すとラズリーテが姿を現す。視界の中に入ったラズリーテの姿を見たシンとクラウディオは、ぽかん、とした表情になり、言葉を失ってしまふ。

最初に出逢った当初のラズリーテの服は、あまりにも年頃の少女が着ているのが可哀想な服だった。だが、今、目の前に入ったラズ

リーテの服装は髪と瞳の色を際立たせるかのような淡い水色のシンブルなワンピースだった。膝丈辺りまであり、靴はこれからの事も考えて歩きやすい靴。アンリが選んだにしてはシンプルそのものであったが、似合っている、の一言に尽きるだろう。

「どうだい？ 俺の趣味も悪くはないでしょう？」

「……僕が驚くとしたら、アンリにしてはまともな選択したよね」「いいかい？ ネオン。人それぞれには似合う服というのがあって自分の趣味を押しつけていては輝かないものさ。俺はそれを知っているから、リーテに似合う服も分かるというもので」

「つまりは、多くの女を相手にしてきたから自然と身に付いたって事だね」

「なるほどな……、それならば納得出来る」

「……たまには普通に褒めて欲しいと思うんだけど？」

驚いた表情を浮かべているシンとクラウディオの姿を見て、更に満足そうに笑みを深めながら自信満々に言葉を紡ぎはするも、ネオン、ギルバートに凶星をさされ、あまつさえ肯定されればぐつと肩を落としながら、恨みがましげに二人を見る。

そんな三人の会話すらも聞こえていないのか、シンとクラウディオの二人はラズリーテを見たままで固まっている。もちろん、何の返答も得られなかったラズリーテは少しだけ心配そうな表情を浮かべながら二人に近付き、顔を覗きこむ。

「あの……？」

「あ、ああ……、似合ってるよ、リーテ」

「本当ですか？ ありがとうございます！ こんな服着た事なかったから不安でしたけど……、こんな服を着れたのは嬉しいです」

「そう……、良かったね」

「……………」

「……シン？」

「リーテが可愛くなったから、照れてるだけだよ」

「ばっ……、余計な事言うな、クラウディオ！」

凶星を指された為か、顔を僅かに赤らめながら慌てて否定するよう
うに言いはするも言葉よりも表情が正直らしく、そんなシンを見て
いた他の仲間達はクスクスと可笑しそうに笑みを零す。零されたシ
ンは軽く舌打ちをしながら、赤い顔を隠すように顔を逸らす。

ラズリーテのみ、状況を理解出来ていなかったようだが、皆が楽
しそうにしている事だけは分かったのだろう、釣られるように微笑
みを浮かべる。

そして、買い物などを終えた一行は、神都「レヴェリッジ」
へと向かう度を再開させるのだった。

多くの街の人に見送られながら出発する一行は、穏やかな空気に包
まれていて、これから起こる事やこの先に起こりうる最悪の事態を
まだ、想像出来ずにいた。

第一幕 完結

荒廃の地（1）

神よ あなたの愛するローズが
あなたに唄を捧げます

世界に蔓延る負の禍
人々を危険に晒す災い

全ての天災を 私が全て受け止めましょう

人々が安らかに 穏やかに日々を過ごすために
私がこの身を贄にし 守りましょう

神よ あなたの愛するローズの唄が聞こえたならば
どうか この唄を聞き届けてください

私はこの身と唄を
あなたに捧げましょう…

与えられた塔で唄を紡ぎ終わった『紫薔薇』リラは、ふう…と一息つくくと速まる鼓動を抑えるように何度か深呼吸を繰り返していたが、ずきん、と胸に痛みを感じ、その部分を握り締めながらその場に座り込む。

慣れるべきでもないのかも知れないが、心臓に悪いのは確かで倒れている姿を見る度に　もしも　の時の事を想像してしまう。このまま、二度と目を覚まさないのではないかと。

ラシエルは祈るように握っている手を自分の額に当てながら、少しだけ握っている手に力を入れる。今の所、彼女がこんな風に倒れる事を知っているのは自分と王であるエリフアレイトだけだ。それ以外の人物には彼女から言わないで欲しい、と口止めされている。

だが、ふと思う。唄を歌い終わった後に倒れた事はあっただろうか。大抵は効果が出るにも時間が掛かるという彼女の言葉通りに十分は経過してからのはずなのだが、今回は唄を歌い終わってすぐだった。　何かが、起こっているのだろうか。

「……………ラ、シエル……………」

「姫っ！　お身体の方は……………」

「う、ん……………、さつきよりは治まってる、けど……………。……………おかしいよ、ラシエル」

「姫？」

「あのお方に届くまでには数分の時間が掛かるはずなのに……………、どうして……………？　……………わたしの、唄の恩恵が届いてない場所がある、の……………？」

不安気に問い掛けて来るリラに、ラシエルは僅かに顔を顰めるだけで何か答える事はしなかった。それだけで、自分が言っている事は間違っていないのだと思うと、先程の痛みとは別の痛みが胸に走る。

薔薇姫　と呼ばれる以上、この大陸の　人柱　と生きなければいけない。そうする事が自分達に課せられた運命でもあり、宿命。

薔薇姫　と名乗る彼女達も分かっている事だし、自分も分かっている。

それなのに、その 人柱 としての役目を果たせないのが、
こんなにも苦しくて、辛い。大陸全土に恩恵が行き渡るには時間が
掛かる事は分かるが、時間が掛かれれば掛かるほど、人々に禍が振り
かかるのだけは嫌だった。

あんな苦しみは、自分だけで良いのに、と心からそう思う。リラ
が俯き、握っていた手が弱々しく握り返されつつも、僅かに震えて
いる事に気付いたラシエルはどう言葉を掛けるべきか分からずに暫
し、迷いつつも握っていた手を軽く引く。

「えっ……！？」

ベッドの上で寝かされていたリラは大した抵抗も出来ないまま、
近くに居たラシエルに引つ張られるまま、その腕の中に引き寄せら
れる。ラシエルは抱き締める事はしなかったが、空いている手でそ
っとリラの頭を撫でる。

「……姫。姫は頑張っておられます」

「でも……」

「人の心から 負 の感情全てを奪い取る事など不可能なのです、
姫。例え、それが神と呼ばれる方であろうと…… 正 の感情があ
る限り、 負 の感情は必ず存在します。 貴方様は頑張ってお
られる、生まれ続ける 負 の感情を最小限に食い止めておられる。
…… 貴方様が悲しまれる必要はないのです、姫。貴方様は 薔薇姫
としての責務をきちんと果たされています」

「ラシエル……っ……」

ゆっくりと言い聞かせるように紡がれた言葉にリラは、抑えてい
た涙が溢れ出し、ぎゅっとラシエルにしがみつく。決して声を上げ
る事はしなかったが、涙だけは流れている事が分かったラシエルは
これ以上は何をすればいいかは分からず、頭を撫で続ける。

そう、彼女のおかげで最小限の被害で抑える事が出来る。

だが、その最小限はあくまでも自分達を知る範囲での事。この大陸「エバーガーデン」の全ての土地の事を把握する事など、一介のシュヴァリエである自分には分かりはしないし、大陸の人柱と呼ばれる薔薇姫であっても分かりはしないだろう。

たった一人、この大陸を統治する神王と呼ばれる、王以外、全てを知る事など出来るはずはないのだ。自分の言葉など気休めにしかならない事は分かっているが、それでも彼女の不安がほんの少しでも拭ってやれるのであればそれが一番だろう、と無理矢理にでも自分を納得させる。

(……もし、貴方に問い掛けても決して答えては下さらないでしょう？ 陛下。……例えそれが、グレン様やマクシミリアン様であっても)

たった一人で、その重圧に耐えきる事が出来るのが、神王だ。神の声を聞きし存在、薔薇姫であっても神の声は聞けないのだというが、その真意は分からない。分かっているのは、このレヴェリッジに咲き誇る、五つの薔薇達には神の声が聞こえないという事だけ。もう一つの薔薇、『青薔薇』には聞こえるのだろうか、とラシエルはリラを慰めながらぼんやりと考えていた。

旅を再開させた『青薔薇』の一行ではあったが、これからどの道で神都『レヴェリッジ』へと向かうのかを話し合うために地図を囲むようにシュヴァリエ達は話していた。ただ、一度も外へと出た事なかったラズリーテは地図を見てもどこに行くべきかなど分からなかった為に少し離れた場所で、ぼんやりと空を見上げていたのだ。がふと誰かに呼ばれたような気がして辺りへと視線を彷徨わせる。

視界の中に入ったのは、ようやく見慣れてきたシュヴァリエ達だ

けで他に人などは見当たらない。元々、それ程、町の外などには出ないのだという話を聞いてはいたし、何よりも自分の名前を知る者が少ない事は誰よりも自分が分かっていた。

気の所為かな、とラズリーテは思いながらももう一度、空へと視線を向けると今度はハツキリと声が聞こえて行く。

（この先へと行くのはお止め、我が愛しきローズ）

「……………え？」

（ローズ…リラの恩恵が届かない地へと行くのはお止め。……………そなたを危険な目に遭わせる訳にはいかない）

「え……………あなたは、誰……………？」

（いいね？ この先へと行ってはいけないよ）

頭の中に直接響く声の主が誰なのかが分からなかったラズリーテは問い掛けはするも、その声の主はただ、繰り返すように忠告をするとそれ以上、何かを話す事もなく、自然と声は消えていった。

聞いた事のない声。

ただ、「我が愛しきローズ」と言えるのは極々限られた存在であり、自分が『青薔薇』と知る者も少ない。その少ない中で考えられるのはたった一人しか居ない事にラズリーテは気付きはするも、それが指す意味が何なのかを知らればぎゅっと服を握り締める。

胸が痛い。痛みで、涙が零れそうになる。

どうして自分だったのだろう。どうして自分の時だったのだろう。

どうして『青薔薇』は存在してしまったのだろう。その答えなど

どありはせず、ラズリーテは僅かに俯く。

「ラズ？」

「え？ あ……………、ギルバートさん。話し合いの方は…？」

「まだ続いている。というよりは言い合っているだけの気がするが

……………、ラズはどうした？」

「……え？」

「泣きそうな表情をしている」

俯いた途端に聞こえた声に、ラズリーテははっとしたように顔を上げて見えた人の名を呼べば、気になった事を問い掛ける。ギルバートはどこか呆れたような物言いをしながら、ラズリーテの隣に腰を下ろすとじっと見ながら、気になった事を聞く。

聞かれた意味が分からなかったラズリーテは首を傾げると、ギルバートは一言、指摘するように言えばぽん、と手をラズリーテの頭の上に置く。その手が妙に優しく感じられたラズリーテは堪えていた涙が零れそうになるのが分かり、必死に堪えるようにギュツと口を嚙む。

それだけで言い辛い事なのだろうという事が分かったギルバートは深く追求する事もせず、頭の上に乗せた手で撫でるようにしながら、少し離れた場所から聞こえて来る仲間達の騒がしい声に耳を傾ける事にした。

その方がいいだろう、と思いながら。

荒廢の地（2）

神都『レヴェリッジ』の王の執務室では、エリファレイトが退屈そうに書類に目を通していた。この程度ならば、わざわざ王の目を通さなくてもいいのでは、と思うような書類も混ざっており、エリファレイトは、はあ、と溜息を吐く。

そもそも、自分にはこういう事務仕事は向いていないのだという事を改めて自覚する。身体を動かしている方が気が楽だし、ただ上辺だけを綴った書類を見るよりは見聞を広げるように外に行ったり、本を読んだりした方が自分の身になる。

だが、それが出来ないのが、神王と呼ばれる存在で。

この大陸を束ね、治めなければいけない存在。年若い所為で、先代の王に仕えていた重臣達は未だに不満を漏らす事がある。それは仕方のない事だと思っし、自分でも納得している事だ。経験不足だと言っ事は身に染みて分かっている。

それでも、この神都 否、大陸には神王と呼ばれる存在が必ず必要だった。神の声を聞きし者、それは神の絶対庇護を受けるこの大陸にとっては最重要な存在。血によって引き継がれる王とは違い、大切にされている薔薇姫達は血によって定められるのではなく、魂の輪廻という鎖に繋がれ、延々とその使命を引き継いでいく。

エリファレイトはそう思うと、ふと書類を持っていた手をだらんと下に落とし、おもむろに天井に目を向ける。薔薇姫 という存在に依存し過ぎて、彼女達に頼らねば生きて行く事すら儘ならなくなってしまう者達。

彼女達を、魂の輪廻の輪から離してやりたいと願う事は、大陸の

民達に死ねと告げると同義語だ。だからこそ、エリファレイトは、ただ、薔薇姫達に頼むしかない。唄を歌って欲しい、と。

そして彼女達は、自分の言葉を聞くと当たり前のように微笑みながら頷く。それが自分達の役目なのだから喜んで引き受けます、と反論も何も言わずに唄を紡ぐ。

(…………分かってる、今はそうする事でしか民を守れないという事も。だが、実際に守れているのか…？ 全ての民を守る事が出来ていると、誰が言える？)

ふと浮かんだ疑問に、エリファレイトは複雑な思いで自嘲気味な笑みを浮かべる。誰も答える事の出来ない疑問の答えを持つのはたった一人、自分だけだ。神に答えなど求める事は出来ないし、薔薇姫達は自分の役目をこなしてくれている。この大陸の全てを把握するのは、自分のみだ。

「陛下？」

「…………ん？ ああ…………、グレン、マックス。どうした？」

「少々報告したい事がありました…………、考えているご様子でしたが、邪魔をしましたか？」

「いや、別にいい…………。で？ 話したい事ってのは？」

「『薔薇』一行について」

「…………話せ」

控えめに呼ぶグレンの声に気付いたエリファレイトは、机の前に立っている二人へと視線を向ける。グレンはどこか申し訳なさそうな表情をしつつ聞かすが、エリファレイトは気にすると言わんばかりに首を横に振れば、ここに来た用件を促す。

公務の時であるので、彼らが堅苦しい言い方でも注意する事はない。促されるまま、グレンは一言でそう告げると、エリファレイト

は顔を引き締めると、話を促す。グレンは頷き、後ろで控えていたマクシミリアンへと視線を向ける。

向けられた事に気付いたマクシミリアンは持っていた書類をエリファレイトとグレンの二人に渡し、自分の手元に残った書類に視線を落としながら口を開く。

「情報は不確かですが、ある街にて『青薔薇』一行が事件を解決した、と」

「……事件？」

「何でも、悪意ある存在がその街に入り込んでいたらしく、それを青薔薇の力とシュヴァリ工達で退治したとの事」

「……そうか。やはり、ヴァイスとノワールの恩恵が弱い所があるか……」

「そのようで。……それで、『青薔薇』一行が次に向かった先が少し厄介のようで」

「厄介……？」

「『紫薔薇』の恩恵が全く届いていないとされる、荒廃の地に向かった模様です」

「……」

マクシミリアンから淡々と語られた内容に、エリファレイトとグレンは互いに顔を見合わせると頭を抱える。よりにもよって、神都に来るまでの間にそこを通らなくてもいいだろう、と思わず突っ込みたくなるぐらいには落胆している。

恩恵が届かない地がある事を把握しなければいけないのは事実だし、より平等に恩恵が行き渡るようにしなければいけないのも事実だ。だが、どれだけ注意をしても恩恵が間に合わず、届かない地というのは必ず存在する。

荒廃の地 と呼ばれるそこが、代表の地の一つだ。

どのような地かと言われれば、そこに直接赴いた事のない彼らで

は詳しくはないだろうが、その名の通りの場所だと言った者は告げる。

土地が廃れ、人が荒れ、それはひどい有様だと言う。人は住んではいれるが所謂、地の底に落ちた者が辿り着くような場所で危険と隣り合わせの場所だ。若い者から老体まで様々な年代が住んでいるそうだが、止むを得なくそこに住む事になった者やそこにしか行きつく場所がなかったという者さえも居る。

一般的に知られる土地や町などで犯罪などの話を聞かないのは、薔薇姫達の恩恵のおかげでもあるがそれ以上に荒れ果てた血に、そういう者達に移り住んでいるから、という理由も入っている。

「……頭が痛い……。あー……、『青薔薇』のシュヴァリエは何を考えてんだよ……？」

「……申し訳ありません、陛下。ルートに関しては何も言わなかったのです……」

「別にお前を責める訳じゃないけどな。多少の命の危険ぐらいはあってもおかしくないと思ったが……、さすがにそこはマズイだろ？」

「はい。荒廢の地は無法者の世界。年若いシュヴァリエだけでどうにか出来るかが問題で……」

「……あれ、そう言えば、『青薔薇』のシュヴァリエの中に荒廢の地出身居なかった？ グレン」

「……居たか？」

「まあ、うちのローズ・シュヴァリエは実力主義だから、出自かは問わないからなあ……。でも荒廢の地出身で良く、受かったな？」

「どちらかと言えば、荒廢の地出身だから受かったと言つべきかと」

マクシミリアンが少々困ったような表情を浮かべながら、エリフ

アレイトが紡いだ言葉を訂正するように言つとその意味を掴めなかつたエリファレイトはグレンへと助けを求めるように見る。だが、グレンは思い出そうとしているのか、その視線に気付く事はなかつた。

がくつとエリファレイトは肩を落とすつつ、うーん、と考えるように上を見上げる。

恩恵の届かない地で生まれ育つたのであれば、それは人の間ばかりを見て生きてきたのだらうと思う。食料も満足に得られず、いつ殺されてもおかしくない世界で生き続けてきたのであれば、薔薇姫という存在自体憎んでいてもおかしくはないはずだ。

だが、ローズ・シュヴァリエに一番大切なのは、薔薇姫を敬愛し、護りたいと心から思う事だ。それが何よりも大切とされるローズ・シュヴァリエに居たのだから憎んでいる事はないだらう。

(……………そうは言つても……………、俺が知っている範囲で 荒廃の地の出身だと思われる奴は居ないぞ……………?)

同じ事に辿り着いたのだらう、エリファレイトとグレンは互いに顔を見合わせると首を傾げ合う。そんな様子を見ていたマクシミリアンは苦笑を浮かべる事しか出来ずに、僅かに息を吐く。

そこに行きたいと言つたのは彼自身ならば、それは過去の自分を決別する為だろうか。それとも世を知らぬ『青薔薇』に世の裏側を見せたいと思つたからだろうか。問う事すら出来ないのだから、その疑問は解決される事はなかつた。

「荒廃の地に、寄りたい？」

「ああ、出来れば、ね。とは言つてもあそこに寄りたいて言つて

寄ってくれる変わり者は少ない事は分かってるけど……」

「それはそうだよ。噂程度にしか聞いた事のない場所だけど、危険な場所には変わりない。……今はリーテも居るし、出来るだけ危険な場所は避けるべきじゃないのかな？」

「……分かってる。リーテに見せるような場所じゃない事も分かってる。それでも、現実には現実として見て欲しいと思つて、ね」

ぼつんと一人だったラズリーテの元へとギルバートが向かつてから、どのルートで神都まで向かうかという話の最中だったのだが、予想もしなかった場所の名前が出てクラウディオは聞き返すように言葉を繰り返す。提案をしたアンリは驚かれるのは予想済みだったようで自分の思っている事を口にするのだが、クラウディオは少々困つたように苦笑を浮かべながら、一般的な意見を口にする。

アンリはクラウディオの意見に頷きつつも、どうしても意見は変えられないとばかりに言葉を繰り返す。こういうアンリを見る機会がなかった為かクラウディオは困つた表情のまま、黙っていたシンとネオンへと視線を向ける。

本当ならギルバートに意見を求めたい所だが、生憎彼はラズリーテの元へと向かつてしまった。確かに彼女を一人しておくのは可哀想だと思つし、行つてくれた事には感謝しているが今はそれを許した自分に文句を言いたい気分になった。

視線を向けられた二人は、まずは互いに顔を見合わせる。ネオンはほぼ呆れを通り越してどうでもいい、という感じに僅かに首を傾げる姿を見ればシンは小さく息を吐く。

「故郷に寄りた理由でもあんのか？ アンリ」

「……」

「故郷つて……え、故郷？ アンリつて、荒廃の地、出身だったわけ……？」

「ローズ・シュヴァリエはどこ出身だろうが実力主義の場所だから

な、どこ出身だろうが咎められねえよ。わざわざ、出身地を話す奴も居ねえけど、偶然話を聞こえてきてな」

「風に乗せられてって感じ？ でも……へえ、アンリがそこ出身だとは思わなかった。ローズ・シュヴァリエに入ったのは、どうして？ 薔薇姫達に文句でも言いに？」

「俺について問い掛けるのは結構だけど、それは荒廃の地に行けば分かる事だよ。別に避けてもいいし、俺は文句を言うつもりもないよ。後は皆で決めて」

シンから告げられた言葉に、クラウドディオもネオンも純粹に驚いた表情を浮かべるがアンリは肯定も否定もせずに自分に言いたい事だけを告げると、話し合いの輪から抜けて、ラズリーテとギルバートの元へと行く。

その様子を見送りながら、どうしても彼が 荒廃の地 の出身者だとは思えなかった。恩恵の届かぬ地で生きる者であれば、生活も荒れ、人々も荒れている。そこで生まれ育ったのであれば、あれ程の性格でいられるだろうか。

うーん、と考えるように首を傾げてしまったクラウドディオを見てシンは困ったような笑みを浮かべて、大袈裟過ぎるぐらいに、はあ、と溜息をつく。

「クラウドディオ、考えるのも結構だがさっさと行き先を決めてくれ。別にネオンは、どこに寄ろうが構わないんだろ？」

「僕は、そういう場所には慣れてるからね。寄ったって構わないよ、対処の仕方も学んでる」

「……………そりゃ、心強い事で」

「仕方ないなあ……………、分かったよ。荒廃の地 に寄って行こう。

確かにリーテには、現実を、知って欲しいからね……………」

「……………？」

二人も行きたい、という気持ちが伝わって来たのか、クラウディ
オは降参とばかりに苦笑交じりに諦めたように告げれば、最後の方
はぼつり、と小さな声で呟く。それを聞き取る事が出来たシンは僅
かに首を傾げはするも、その意味が指す先を掴めずにいた。

荒廃の地（3）

「……………荒廃の地？」

行き先が決まったという事でそれを知らされたラズリーテは、その言葉を繰り返すようにきよとん、と首を傾げる。その意味が指す先が分からなかったのだろう、その意味を教えて貰うかのように面々を見渡すも返って来るのは苦笑ばかりだ。

苦笑が何を指すのかが分からず、更に首を傾げる。話し合いに加わらなかつたギルバートは行き先を聞いた時、いつもの無愛想が僅かに崩れ、どこか呆れが含んでいるような気がした。少し後で合流してきたアンリが提案した場所なのだと言う事は、彼に聞けば教えてくれるだろうか。ラズリーテはアンリへと視線を向ける。

「アンリさん、あの……………」

「場所に関しては、言うよりは見た方が早いよ。君に分かるように言うのなら、薔薇姫の恩恵を得られなかつた地、だよ。」

「……………え？」

「特に 紫薔薇 の恩恵を得られない土地だね。」

アンリは簡単にだけ説明するように言うと、ラズリーテは驚いたような表情を浮かべる。自分も薔薇姫であるので、他の薔薇姫達の恩恵が何を指すのかを知っている。恩恵が届いていない地があるとは思わなかつた為に、驚きの表情のまま固まってしまふ。

そんなラズリーテに関してアンリは僅かに苦笑を返すだけで、一度だけ他の仲間へと目を向ける。一番最初に反対していたクラウデ

イオはもう既に諦めたという表情を浮かべ、視線が合うと僅かな微笑みだけを返してくれる。それが指す先は、あの場に居たシンとネオンが何らかの口添えをしてくれたという事だろうか、と思い、二人へと視線を向けようとするもその前にぼん、と肩を両方から叩かれる。

叩いてきたのは丁度、視線を向けようとしていたシンとネオンの二人で。

「ほら、道案内しろって。出来るだけ安全な道選べよ。俺の風を当てにしてもいいけど…土地勘のある奴に案内させた方が確実だろ」
「そういう事。周りの警戒は僕ら二人でしとくよ…、慣れてるしね。何を見せたいのかは分からないけど、見られる範囲の光景だけにしよてよね」

両側から歩くように促されれば、アンリは何と言うべきかも分らずに小さく頷けばゆっくりと歩き出す。先頭を歩くアンリと僅かに距離を取って、辺りを警戒するように歩き出したシンとネオン。あまり見られない光景にクラウディオとギルバートは少しだけ驚きの表情を浮かべはするも、悪い事ではないので固まったままのラズリーテの両側へとつく。

「リーテ、とりあえずは行こう？ これから見る光景は君が想像もしなかった光景かも知れない。でも、知るべきなんだよ。薔薇姫である君は」

「…クラウディオさん」

「世界の表も、裏も、君は知らなければいけない。 青薔薇として」

「……………」

「…クラウ？」

「ん？ ……ああ、何でもないよ、ギル。行こうか、置いて行かれ

てしまうから」

クラウドディオが繰り返すように言った言葉の意味だけは何となくだけ分かったラズリーテは、僅かに俯きつつも小さく頷く。その様子を見ていたギルバートはどこか訝しげにクラウドディオの名前を呼ぶと、クラウドディオはほんの僅かにだけ微笑みを浮かべ、歩き出す。それ以上は聞く事が出来なかったギルバートは、ああ、とだけ返して俯いたままのラズリーテを促すとゆっくりと歩き出しながら、前を歩く三人や隣を歩いて二人を見て小さく溜息を吐く。

彼らの事を、自分は何も知らない。確かにローズ・シユヴァリエ内では年近い事もあったし、良く一緒に行動をしていたかも知れないが、それでも何も知らないのだ。もちろん、彼らも自分の事など知りはないだろう。

噂程度、簡単な話程度の事しか知らない立場でしかない、仲間話したくないというのはあるだろうし、その気持ちは分かるつもりだ。知られたくはない事はあるかも知れないが、アンリは、自分の過去を、自分の生まれ故郷を見せようとしている。

それが何を意味するかなど分かりはしないし、先程のクラウドディオの言葉の意味も分からない。どれだけ考えても答えなど出そうにない気がして、ギルバートは深々と溜息を吐いた。

それから数十分ほど、歩いた頃だったろうか。先頭を歩いていたアンリが足を止めた為に、それに釣られるように後ろを歩いていた人達も足を止める。

「……………ようこそ、 荒廃の地へ。ここは、当たり前のように弱者が虐げられ、強者が実権を握る地だ」

懐かしげに、そしてどこか苦しげに表情を歪めながら仲間達を振り返り、アンリはゆっくりと言葉を紡ぐ。

その言葉を聞きながらもアンリよりも後ろに居た仲間達はアンリ

を並ぶようにして、ゆっくりと前方へと視線を向けると、そこに広がる地は、荒れ果てて、建物は形すら残さずに崩されている。僅かに立っている建物ですらも古びており、今すぐにも崩れてしまいそうな印象すらも受ける。スラム、などという場所すらもここに比べれば、人の住む地としては十分だろうとすらも思えて来る。

ふらり、とその様子を見たラズリーテは足元をふらつかせながら一歩だけ後ろに下がる。

そうなるのも仕方ない。名前ぐらいしか知らなかった場所だと言っても、ここまでとは誰が想像しただろうか。ここに人が生きているとは考えられないぐらいに、ひどい惨状だ。

薔薇姫の恩恵が無ければ、今は綺麗で豊かな地ですらもこうなってしまうと思えば、ぞっとする。本当に自分達という存在は薔薇姫の存在無しではあり得ないのだという事が良く分かる。

ここで、本当に、アンリィブラディという人が生きてきたのだろうか。本当に目の前に居る彼がここで生まれ、育ち、生きてきたというのだろうか。心すらも荒んでも仕方ない場所で、彼のような存在が本当に生まれるのだろうか。

それがどうしても納得出来なかった、シン以外の三人はアンリィへと視線を向ける。シンだけはそちらへと目を向けず、どこか辛そうに目を伏せる。視線を向けられたアンリィは苦笑を浮かべながら特に何か言う事はせずにゆっくりと、故郷へと視線を戻す。

戻って来た。

本当は、戻って来る気などほんの少しもなかった。ローズ・シュヴァリエに入る事が出来たその日に、この地を胸に留めながら、決して戻って来るなどと思う事はしなかった。

それでも、自分は、ここに戻る事を選んだ。

見て欲しかった。知って欲しかった。薔薇姫という存在に、何よりも彼女という存在に。自分が生きてきた場所を、訪れて

欲しかった。

彼女にとつてそれがどんなに辛い事だとしても、我儘だと言われ
ても、例え、嫌われたとしても。それでも見て欲しかったのだ。世
界の全てが、幸福 に満ち溢れてはいない事を、知って欲しかっ
た。

自分は、ここで生まれ落ちた事も生きてきた事も不幸だとは思っ
た事はない。自分にとつての世界は最初からここで、ここ以外の場
所は知らなかったからそう思っていた。他の場所を見てきた今では、
それが 不幸 であつたのだという事は理解出来ているが、それ
も不幸だとは思わない。

(……………違う、思わせてくれない)

そう思えば、この地で生きてきた自分を簡単に消す事が出来る
のに、思う事すら出来ない。この地で生きる事が出来た自分を 不
幸 とは思わず、幸福 だと思ってしまう自分が居るのだから。
アンリは自嘲気味に笑みを零しながら、一歩だけ後ろに下がって
いるラズリーテへと視線を向けて、そつと手を差し伸ばす。

「リーテ。もしも、君がここへと来る事を拒むのなら俺はそれでも
構わないよ。君のような女の子は、本当ならこんな場所を知る必要
なんてないのかも知れない。……………でも、君には知って欲しかったん
だ。これは俺の我儘で、俺の勝手な言い分にしか過ぎない」

「……………アンリさん」

「俺の故郷へと足を踏み入れてくれるなら、この手を取って欲しい。
……………本当に嫌なら、俺は諦めるし、もうここには訪れないと約束
する。ここは光に隠された、闇の一部分だから。光の中で生きる人
達に、闇を見て欲しいと思う事すらおかしいのかも知れないから」

ゆっくりとアンリが言葉を紡ぎ、ラズリーテは黙ってその話を聞

いていた。想像もしなかった場所。見た事もない、こんな場所があるとさえも考えなかった。

ここが目の前の人の生まれ育った故郷だと言い、彼は、見て欲しいと願った。自分が見て、何かが変わるのかは分からないが、それでも見て欲しいと願われたのであれば、見なければいけないような気がする。これからの時間で、自分は知らなければいけない。

この世界の事を。大陸の事を。そして 薔薇姫 という存在を。

ラズリーテは少しだけ躊躇いはするも、恐る恐る手を伸ばして、差し出されているアンリの手を取る。アンリはほんの僅かにだけ驚いた表情を浮かべるが、すぐにどこか泣きそうな表情を浮かべ、「ありがとう」とだけ言うと、ラズリーテの手を握り、ゆっくりと歩き出す。優しく引く手に導かれるようにラズリーテもまた、歩き出す。

「……世界の闇、か」

「ネオン？」

「そういう意味では、僕も間違えなく、闇に当たる部分で生きてきた人間だよ。……本来なら、日に当たる事すらも許されない人間」

「……………」

「それでも僕はここに居て、アンリもここに居る」

それだけ言い残すとネオンは、二人の後を追うように歩き出す。

ギルバートは黙って、話を聞く事しか出来なかった為に何か言う事も出来ず、ただ、足を動かす事にした。

そんな仲間達の様子を見ていたクラウディオであったが、僅かに溜息を漏らし、歩き出そうと思った時だったろうか。身じろぐ事もせずに、ただ、荒廢の地 を見ているシンに気付き、声を掛ける。

「シン？」

「……………光があれば、闇は必ず存在する。それすら知らねえのかもな、薔薇姫 は」
「……………」

たった一言呟いたシンの言葉に、クラウディオは口を開きかけろがすぐに閉じ、何も言わずにシンの肩を叩くと追うように歩き出す。そんなクラウディオに対して、シンは僅かに苦笑だけ浮かべれば、歩く事にする。

知らなければいけないというのであれば。

彼女が知らなければいけないならば、それを護る存在として自分達は付き添わなければならぬ。どれだけ危険であっても、どれだけ彼女の心を傷付ける結果が待っていたとしても。彼女が知りたいと望み、行く事を願うのであれば、それを止める権利など、自分達にはありはしないのだから。

過ぎ去らない時間と記憶（1）

『いいかい？ アンリ。薔薇姫を慕い、感謝こそすれど、恨むなどはあつてはならないんだよ。いつも微笑みを浮かべ、当たり前のようにその身を削って下さつておられる方達だ。……僕らのような存在では、決して手の届かないけれど、それでもいつもあの方達は僕らを思つて下さつてくれる』

荒廃の地へと足を踏み入れ、懐かしき、見慣れた風景が見えてきた時だつたらうか。アンリの頭の中に、ふと愛しく、懐かしい人の声が聞こえてきた気がした。

泣きそうになるぐらい優しいこの声に、何度同じ事を言われただらう。そして、何度自分は、飽きずに聞いただらうか。それだけ、あの人の言葉は自分にとっては影響力があり、自分の中で、話の中に出て来る 薔薇姫 という存在に想いを馳せた。

想像する事しか出来なかつたけれど、それでも、思うだけで暖かな気持ちに包まれたような気がした。そうする事で、見た事もない人達の力になれているような、そんな気すらもしたのだ。幼い自分は、当たり前のように、あの人の話に出て来る人達を恋慕っていた。恋情よりは憧れに近く、決して手の届かない存在だと知っているから、ただ想うだけでも幸せになれた。荒れた地に居ながら、心だけは常に潤わされていたのだ。だから日々を生き抜く事すら、苦にはならなかつた。

（……………俺は、帰つて来たよ）

二度と、戻って来ないだろうと思つた場所に。仲間と、そして憧れてやまなかつた、自分が仕えるべき 薔薇姫 と共に。

手の繋がっている、想像の中でしか逢う事の出来なかつた薔薇姫 ラズリーテは、自分の手をしっかりと握りながら、一生懸命歩いている。後ろを振り返つてみれば周りを警戒しつつも、はぐれなように着いて来る仲間達が居る。

アンリは泣きそうな感覚になりはするも、それを見せる訳にもいかなかった為に前を向くとそこに広がるのは幼少時から何一つとして変わらない場所が広がる。豊かな暮らしに慣れてしまった人達であればこの場所で生きていく事など出来はしない。よほど順応が早いか、それともこの世界で生きていく術を知っている者しか、生き抜く事など出来ない。

実際、 荒廃の地 では、日々の死亡者が途切れる事はない。必ず一日に一人は、死人を見る事になる。それが当たり前と感じてしまふ感覚は、今であればおかしかつたのだ、という事が分かる。人が死ぬ毎日が続く事のどこが当たり前なのだろう、と自分に言う事が出来る。

この世界での当たり前は、ここを出た世界の当たり前とは全てが反対だつた。でも、当たり前が当たり前ではなくなつた時は、安心した記憶がある。 ああ、もう、気を張る必要などないのだ、と 周りを警戒し、出逢う者全てを疑い、ただ自らが生きるだけの為に他人を犠牲にするような生き方は選ばなくて良くなつたのだ、とでも、少しだけ疑問が残つたけれど。

どうして あの人 はこの外の世界から、光に隠れてしまった闇 の部分へと来る事を選んだのだろうか。外の世界で生き続けていれば今も尚、生きている事が出来ただろう。自分と出逢う事はなかつただろうが、それでも生き続けるべきだつたのではないだろうか。

誰よりも、この世界を愛し、薔薇姫を敬愛し続けていた あの人 は。

「……そーいや、アンリ」

「え……あ、何？」

「何、ぼーっとしてんだよ。…… 荒廢の地 に寄ってくのはいいが、長居は出来ねえだろ？ 行きたい場所でもあんのか？」

「……ああ、うん。お墓参りに、行くつもりだよ」

「墓参り？ 誰の？」

「俺の、師であり、育ての親だった人の」

考えの渦に埋まっていたアンリであったが、シンから声を掛けられてはっとしたように慌てて返事をする。そんなアンリの様子に呆れた様子で注意はするものの、シンは気になっていた事を問い掛けると、アンリは想いを馳せるようにぼつり、と答える。

ラズリーテにこの地を見て貰いたいと思った気持ちに偽りはない。

でも、それ以上に、あの人に彼女を紹介したかった。薔薇姫という存在がこの地を見に来てくれた事を、今まで人の目に晒されずに、それでもこの世界の事を想い続けてくれていた 青薔薇 が居たという事を。

なるほどな、とシンが納得したような声が聞こえるとアンリは苦笑を浮かべる。シンからすれば、墓参り などと言う言葉は無縁だったかも知れない。それでも素直に答える以外はなかったし、ここで謝るのもおかしい気がしたので何か言う事は止めておいた。

「それで、アンリ？ その人のお墓はどこに作ったの？」

シンがそれ以上は深くは聞かなかつた為、黙って話を聞いていたクラウドイオはとりあえず、目指す場所を聞いておこうと思ったのか問い掛ける。アンリはそれに対しては言葉で答える事はせずに、空いている手をすつと上げて、ある一点を指差す。

指された先にあつたのは、小高い丘だ。あそこならば、荒廢の地の全てを、とは言えないかも知れないが大体は見渡す事が出来るかも知れない。

なるほど、と納得したように頷いたクラウディオを見てアンリは苦笑を浮かべる。深く問い掛けてこない仲間達には感謝はしているし、それだけ信じて貰っているのであれば嬉しい事だ。そこまで信用に値する男かどうかは別になるのだが。

とりあえずは行くべき場所が決まったために、そこへと向かう事にする。一応は人が住んでいるという居住区へと足を踏み入れる。

『……本気なの？』

『ああ。選ばれた事は光栄に思うし、あの方達のお傍に居れて護れる役目を僕に与えられるとは思っていなかったから、幸せで満ち溢れているよ。……でも、僕には無理だよ。薔薇姫を護る資格を持たない』

『どうして？ 君以上にローズ・シュヴァリエとしてふさわしい人は居ない。それは団長だつて認めてるからこそ……』

『それでも、僕には、無理だよ。あの方達の傍に居れば、僕はきつと持つてはいけない感情を抱く事になる。それを抑えられる自信が少しもないんだよ』

『……ジゼル』

神都レヴェリッジにある城のある一室　マクシミリアンは自分に与えられた執務室で書類に目を通しながら、ふと昔、友だった人を思い出す。

彼ほど、薔薇姫を心から想う者はいなかったと思う。実際にあれほどまでに想う人に出逢った事はない。だからこそ、喜んで拜命すると思つたのに、彼はそうしなかった。申し訳なさそうな表情を浮かべ、深々と頭を下げ、断りの言葉を口にした。

誰もが驚いた表情をする中で、自分だけは複雑な思いが巡っていた。

資格がないのだと。自分には、その資格は持ちえないのだと、彼は苦笑を浮かべながら話してくれた。だが、その資格というのは彼自身の中にある資格の基準であり、ローズ・シュヴァリエにおける資格ではなかった。

だけど、彼はその話を断った事を後悔はしていなかったし、逆に断りをした事に心を痛め、申し訳なさとの罪の意識に囚われ、ローズ・シュヴァリエから去って行った。誰に言うのでもなく、誰の目に触れる事もなく、そつと、跡形もなく姿を消したのだ。

それから数年、数十年の時を経て、グレンと自分がローズ・シュヴァリエを束ねる立場になった時、現れたのが、アンリであった。

荒廃の地 出身でありつつも、薔薇姫を敬愛する心を持ち、彼の扱う刀の腕は申し分なかった為に入団した。

自分には、アンリの姿が、昔の友に重なった。刀の扱い方、薔薇姫に向ける心も、彼自身の話し方、性格その他が彼自身に似ていた。そっくりとまではいなくても似ていたのだ。

アンリに直接聞いた事はないし、自分の記憶と酷似しているというだけで確証はなかったが、それでも彼が戻って来てくれたような、そんな感覚があった。でも、戻って来たのではなく、居なくなつたのだと気付いたのはそれから少し経った時の事だった。

「マックス、入るぞ。この書類について聞いた……………、マックス？」

「……………グレン？ あれ、どうしてここに」

「少し聞きたい事があったから来たんだが……………、どうした？ 泣きそうな表情をして」

「そんな、事は……………」

「何十年の付き合いだと思っっている。お前の表情の変化ぐらいは分かるようになってる。……………どうした？」

「……………グレンは、覚えてる？ 薔薇姫を護る任を与えられながら、

「ここから去ったシュヴァリエの事」

「ああ、覚えている。名は確か……そうだ、ジゼル＝ブラディ」

「聞き覚えはない？ その姓に」

「何？ ……まさかっ!？」

グレンが苦笑交じりに話すように促すと、マクシミリアンはまいった、とばかりに笑みを浮かべながら問い掛けるとグレンは頷きつつ、記憶を辿り、名前を口にする。正解、と言わんばかりに頷いたマクシミリアンは更に問い掛けつつ、グレンは訝しげな表情を浮かべはするもすぐに何かに思い当たったように驚いた表情を浮かべる。

「…… 荒廃の地 に向かった理由だよ、きつと、ね」

「そうか……、あれほどの使い手が、若くして亡くなったのか。…

…… そうだったな、そう言えばお前は友だったか」

「うん。まあ、ね」

「……………」

全てが納得したかのようにグレンは頷きつつも惜しい、というように呟きはするもふと何かに気付いたようにマクシミリアンへと視線を向けると、苦笑交じりに頷く姿があったのでそれ以上、深く言う事はしなかった。

何故、彼が 荒廃の地 へと向かったのかなど分かりはしないが、それでも彼の存在は今も記憶から消えずに残っている。それだけ彼という存在は、強く輝ける存在だったという、何よりもの証拠だった。

過ぎ去らない時間と記憶(2)

居住区へと足を踏み入れた一行が目にしたのは、想像を絶する光景だった。遠目から見ていた時よりもその 荒廃 ぶりは目を疑いたくなるぐらいにひどいもので、ここで人が本当に生きていけるのだろうか、とさえも思う。

薔薇姫の恩恵を受けられなかった地は、こうなる運命を辿る。つまりは、自分達が暮らしてきた地ですら、一歩間違えればこうなっていたかも知れないという事だ。そう思うとぞっとする部分もあるが、自分達を先導するように前を歩くアンリは、本当にここで生きてきたのだろうか。

幼き頃から、ここで生きていたとしても、アンリのような存在が本当に育つのだろうか。自分達が知っている限りのアンリの姿を思い返せば、どうしても疑いたくなってしまふ。

前を歩くアンリは、仲間達から痛い程の視線を受けて苦笑を浮かべはするも、懐かしき故郷をざっと見回す。何一つとして変わりのない場所。否、もしかしたら、自分が居た頃よりも荒廃が進んでいるのかも知れない。

だが、それに反するようにここで生きる者は少しずつ、確実に増えていく。薔薇姫の恩恵を受ける事が許されない者が流れ着く場所。初めから恩恵を受けるが出来なかった者。 薔薇姫 という存在を、憎む者。

いずれにせよ、ここに居る者達は 薔薇姫 に良い感情を抱いてはいないだろう。不公平な生き方を強いられているのだから。それが彼女達の所為ではないとしても、彼女達の所為にするしか、行き場のない気持ちに向けて先がなかったからだ。

(実際、俺もそうだった)

あの人に出会う以前の自分を思い出すと、アンリは苦笑を零す。

今の自分とはまるで正反対。ローズ・シュヴァリエなんて目指すはずもなかったし、荒廃の地を出ようとすらも思わなかっただろう。ここが自分に生きる場所で、ここで死ぬんだと子供ながら理解していたからだ。

でも、奇跡とも呼ばれる偶然の中、自分はあの人と出会う事になった。それは生きてきた時間の中でもっとも感謝した奇跡だった。

「アンリさん」

「……ん？」

「これからお墓参りに行く人のこと、教えてくれませんか？」

「知りたいの？ リーテ」

「はい。だって、アンリさんの大切な人なんですよ？ だったら、皆も私も色々とおいておいた方がいいなあ、と思ったんですけど……」

駄目ですか？とじつと見つめられてラズリーテに言われれば、駄目だと言えるはずもなく、アンリは苦笑を浮かべて、いいよ、と承諾する。その場所まで行くのにはまだ時間はあるし、歩いている最中に思い出話を語るくらいの余裕ぐらいはあるだろう。

アンリはそう思うと、ゆっくりと昔話を語り始める。

外の世界に比べれば確かに地獄と言える場所なのかも知れないが、ここで生まれ育った者に関して言えばこれが普通だった。建物

が崩れていようが、食べ物がろくになく、一日に食べられなくても仕方ないで済ませられたし、衣服は着られるモノがあればいい。その認識がここに住む者達にとつての 当たり前 だった。

親に捨てられるのも当たり前前、友人なんて居ないのは当たり前。周りは全て敵という認識をしていなければ生きていく事すら困難な場所だった。独りで生きるために自分の力だけを頼りにしなければいけない場所。

それは老若男女、関係無くだった。男であろうが女であろうが、年寄りであろうが幼き子供であろうがそのルールは当てはまる。もちろん、男と女であれば力の差は出るし、年寄りや幼き子供は不利と言われるかも知れないが、でもそれが 荒廃の地 にある暗黙のルール。この地で生きるために必ず、誰もが知るルール。

アンリはその中でも特に変哲もない、親に捨てられた幼い子供の一人だった。外の世界でそれは憐れむ事であるかも知れないし、不幸な事なのかも知れないがこの地では日常茶飯事で行われる事。誰もが自分が生きるだけで精一杯の場所で、子供と共に生きる事など出来ない場所だった。もちろん、無理と言われても子供と生きる親も少数ではあるが存在している。

荒廃の地 のルールは、自分の力で全てを手に入れる、という事だった。強奪など日常に行われるし、騙し合いこそ当たり前。生きるために必要なモノを奪い取るために殺し合いが起き、その中で人が死ぬ。荒廃の地 であれば、人が死ぬ事など日常茶飯事であり、それこそ当たり前前の事だった。『強者が生き、弱者は死ぬ』。

弱肉強食の世界。

その中で不利と言われる幼き子供でしかなかったアンリではあったが、一人で何でも、とまではいかないが在る程度は出来るようになって捨てられたためにかろうじてこの地で生きていた。生きるために食料を盗み、人の目に付かないような場所に隠れ家を作り、一日一日を必死に生きていた。

騙し合いが当たり前前のように存在する場所で、気を許せる存在な

んて作れるはずもなかったし、出逢う者全てを疑ってかからなければいけない場所は、常に 孤独 との戦いでもあった。敵に囲まれた中で自分の身体を抱き締めながら、一日を終える。

そんな生活は幼い子供にとっては、辛く悲しい毎日である事は間違えないはずであるというのに、当時のアンリはそんな事にすら気付けていなかったのだ。 荒廢の地 で生まれ、その地で育った者にしてみればこれが 普通 で、幸せとは無縁の生活を送っていたからだ。

何度も何度も思った。

このまま、朝が来なければいいのにと。このまま、夜が明けずに一日が終わらなければいいのにと。敵ばかりの世界で生きるのは苦しい、という気持ちだけは持ち合わせていたためにアンリは顔を埋めながらそんな事を考えつつ、眠りにつこうとした時だったろうか。

「……………うん？」

ふと頭上から、聞き覚えのない青年の声が聞こえる。自分の周りには盗むモノなどはないので、すぐに去るだろうと思ったために顔を上げる事すらしなかったが、いつまでも現れた人が去る気配がしなかった。

「君、一人かい？ こんなに小さいのに……………」

「……………」
「話には聞いていたけど、想像以上の有様だね……………。こんな小さな子供であっても、自分の力だけを頼りにして生きなきゃいけないのか……………」

「……………それが、ふつうのことだから」

上から降って来る声が、どこか優しげであり、寂しげでもある事に気付いたアンリは不思議に思いはするも、ぽつり、と小さな声で呟く。

そう、それが 普通 。この地で生きる者にとっての 常識 だ。アンリの言葉を聞いた青年は、ふっと困ったような、でもどこか泣きそうな表情を浮かべはするもすぐに微笑みを浮かべれば、その場にしゃがみ込む。

「僕は、ジゼル。ジゼル＝ブラディ。 荒廃の地 の外から今日来たばかりなんだよ」

「……外の世界から？ わざわざ、ここに？」

「うん。僕は表の世界では生きられない存在だからね、ここしか行きつく場所がなかったんだ。……君は？」

「……………アンリ」

これが、出逢いだった。

後に師と敬い、時に親のように慕い、まるで家族のように愛しく思うようになる人との。

過ぎ去らない時間と記憶(3)

出逢ったその日から、アンリはジゼルと共に同じ時間を過ごすようになった。と言うのも、ジゼルがアンリの事を心配だと言い出して一緒に居る事を申し出たのだ。最初こそ、アンリは拒んでいたものの、相手が諦める様子がないのが分かれば諦めたように了承の意を示したのだ。

ジゼルはその事に対して嬉しそうに微笑み、「ありがとう」と一言、礼を述べるとアンリは少しだけ驚いたような表情でアンリへと視線を向ける。

荒廃の地 において、礼の言葉など無いものだった。人を恨む事はあれど、人に感謝する事など無いに等しい場所だったから。

それはアンリにとっても当てはまる事であり、自分が感謝する事も、逆に感謝される事もなかったために「ありがとう」という言葉を聞いた時は聞き間違いかとさえも思った。そんな驚きだった訳だが、その意味をいまいち掴めていないジゼルは微笑みながら首を傾げているだけ。

その姿を見てみると、この 荒廃の地 で生きるような人ではないような気が、アンリにはした。外の世界からここに流れ着いた人は知ってはいるが、それはここにしか流れ着く場所がなかったからだ。外の世界では 悪 と取られる事をしたからこそ、ここへと流れ着いただけ。だから、 荒廃の地 の常識は、彼らにとってすれば、嬉しい事なのかも知れない。

けど、今、目の前に居る人は 荒廃の地 の当たり前を、外の世界で犯したとはどうしても思えなかった。この地にはない優しさと暖かさを持っており、それはアンリにとってすれば眩し過ぎるものでもあった。

彼が浮かべる笑顔は太陽のようで、暖かい。それは 荒廃の地
においては、無いものだった。だから、アンリも日々を彼と過ごす
ようになってから、彼の笑顔を見たいと徐々に思うようになった。
何をすれば喜んでくれるのだろう、と考えるようになった。

今まで考えた事すらなかった事だったために、アンリは拳動不審
になる事が多くなった。それを不思議に思ったジゼルは、不意に何
気なく問い掛けたのだ。

「アンリ？」

「え、あ、何？」

「どうかしたの？ 最近、何かおかしくない？」

「い、いや、おかしく、はない、と思うけど……？」

「拳動不審というか……、何か悩み事？ 僕で良ければ、話を聞く
よ？」

「……え、っと……その、ただ、何をすれば、喜んでくれるのかな
……、と。笑ってくれるのかな、と思って……」

「……え？」

「ジゼルが、どうすれば、笑顔になってくれるかなあ……って」

問われれば、アンリはどう答えたらいいか分からずに思ってい
た事を素直に告げる。告げられたジゼルと言えば呆気に取られた表
情になる。全く予想もしなかった事を返された、という事もあるの
だが、嫌という訳ではなく、良い意味で想像を覆された。

荒廃の地 で生き続けるのであれば、きっと考えないような事
を。今まで生きてきた中で一度も考えた事すらなかった事を必死に
それも自分のために考えてくれていたのだと思うと嬉しくて仕方な
かった。

素直に言ったものの、何も返って来なかった為にアンリは少しだ
け困惑したように慌てはするも、そんなアンリをジゼルはふわり、
と優しく軽く抱き締める。抱き締められたアンリはびくり、と身体

を震わせはするも感じた事のない温もりにも何とも言えない安心感を覚える。

「ありがとう」

「……え？」

「ありがとう、アンリ」

「……俺、何もしてないけど」

「アンリ。僕はね、君が僕の為に何かをしようとしてくれていたって事が嬉しいんだよ。君が僕を喜ばせようと考えてくれたっていう事が嬉しい」

「そう、なの？」

「そうだよ。……僕の事を想ってくれてありがとう、アンリ」

困惑したままのアンリは、ただ黙って抱き締められながらお礼を繰り返すジゼルをそっと見上げると、どこか泣きそうな、でもとても嬉しそうな笑顔を浮かべているジゼルが見えた為にほっと安心したように息を吐く。

良くは分からないけど、それでも笑顔になってくれたのであればそれでいい。

どうすれば喜んでくれるか、というのは分からないけれどこれから探していこうと思える。ジゼルが「ありがとう」と言ってくれるのは心地良かった。心の奥底が満たされるような、暖かさが広がるような、そんな感覚で。

今は黙ってこの暖かな腕の中に居ようと思ったアンリは身じろぐ事もなく、大人しく腕の中に収まっていた。そんなアンリをジゼルはどうしようもなく、愛しく感じてしまう。

出逢ったその日は、こんな気持ちを抱くようになるとは思わなかった。ただ本当に子供一人で、荒廃の地 という場所で生きてい

るという現実が悲しくなつて一緒に居たいと申し出たから。自分の腕の中に簡単に入つてしまつぐらいの子供が、孤独が当たり前だと考えているという事がとても辛かったから。

だからこそ、一緒に居ようと考えたのだが、今ではあの時に出逢えて良かったと心からそう思える。こんなにも愛しいと思える存在になつたのだから。アンリ自身もほんの少しずつ変わつていゝうのが嬉しいと素直に思える。

出来るならば、これからもずっと一緒に居られればいい。当たり前のように、互いにそう願うようになっていた事にまだ気付いていなかった。

その淡い願いすらも、叶う事はないのだという事を気付くはずもなかったのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7033j/>

愛しきローズが紡ぐ唄

2010年11月13日11時43分発行